
金剛の武人

パーシアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金剛の武人

【Zコード】

Z0087Z

【作者名】

パーシアス

【あらすじ】

俺の名前は岩元昌也。高校2年生だ。ある日、金髪の美女に、異世界に来ないかと誘われる。冗談だと思ってついていったら本当に異世界。来ちゃったもんはしちゃがいいから、ここで過ごそう。

主人公最強ではありません。また、主人公がハーレムを作ることもありませんのご了承ください。

初投稿ですので、誤字脱字、文章の幼さが目立ちますが、お許しく

ださい。

初投稿なので、評価とかコメントしてくれると嬉しいですー…というか、超欲しいです！

0話（前書き）

これは初投稿作品ですので、温かい田で見守ってくれると嬉しいです。

ものすゝじト手ですが、最後まで読んでくれると嬉しいです^ ^

俺の名前は元昌也。とある学校の高校2年生だ。頭は・・・いい。だが、それも意味はなくなつた。

なぜなら今俺は異世界に来ている。いや、連れてこられたというほうが正しいだろう。

自分も実際何が起こったか理解に苦しむ。辛うじて分かるのは自分が違う世界に来たということだ。

「マサヤ君？」

誰だ？ そうだ、俺をココに連れてきた人だ。

女性で髪は金髪で肩あたりまでの長さだ。そして綺麗だ。

なぜこんなことになつているかといふと、ある日、高校からの帰り道、俺はこの女性に声をかけられた。

「君、違う世界に行つてみない？」

唐突すぎた。3秒ほど頭の整理に使つた。日本に金髪の美女がいることも不思議だが、俺はあまり深く考えなかつた。「冗談だろ」と思ひながらもその人があまりに綺麗だったので、行けるなら行きたいと答えてしまつた。そしたら、

「じゃあ決まりね。あなたに関する記憶はマスターに頼んで、この国から抹消しておくれから。」

オイ待て。マジで？

暗い路地にものすごい力で引き込まれ、金髪が何か唱えると、黒色のどこでもアに似たものが出てきた。もう逃げれないと思つた俺は、その中に・・・入つた。

中は真っ白だつた。10秒ほど歩くと出口が見えた。出ると、砂漠。そして目の前に20メートルはあるかといふ門。

俺はただただ口をあけるしかなかつた。そんな時、金髪が、「君、名前は？」
と言ひ。

「岩元昌也です。」

「聞かない名前ね。あ、違う世界か？」
ふざけてるのか？と思いつつ、名前を聞き返した。

「メアリーよ。」

「すいません、メアリーさん。ここはどうですか？」

「ここはミコーシア。私はとある集団の一人でね、今回私はここに依頼で来てるのよ。」

・・・俺なんで呼ばれた？

「今回の依頼はちょっと一人じゃきついから君を連れてきたってわけ。」
なるほど。

「君はみたところ魔力が多そうだったから来てもらつたわ。あつ、
そうだ、この石に触れて。」

そこには黒い石。俺は手を乗つけた。すると今は、光りだした！
という反応はなく、黒いままだった。

ちょ＼これ大丈夫＼？

「ええ？！多いのは魔力だけ？？でも属性はある・・・」「
やばい？これやばい？」

ずっとメアリーさんが黙つてるので、たまりかねて声をかけた。
すると

「君は魔力量が普通の人より多い。けど、魔術を使うのには適して
いない。」

「それって結局ダメじやんよ。メアリーさんよ。」

「しょうがない。君には体術を仕込むわ。依頼の期間は2週間。今

から5日間あなたには基礎を教えるとするわ。いいわね？

その後の説明によると、俺は魔力を具現化する能力が低いらしく、魔力によって、肉体強化するしかないという。だが、そのうち少しは魔術も使えるようになるだろ」と言われた。それならいいかなと、承諾した。

とりあえず、町に入ろうといわれたので門を抜け、民宿のよつなとこりに入った。
町は広かつた。ものすごい。こんなところで何するんだろ、と思つた。

その後、特訓が始まった。最初は魔力を感じるという訓練だった。
「神経を集中すると何か流れてる気がしない？こっちの世界なら君は間違いなく感じれるはず。」

右手に神経を集中した。確かに温かいものが流れている気がした。
「あとはイメージしだいよ。それを手全体に広げてみて。」

イメージ・・・してみたがさすがに無理だった。
今日はずっと口元を繰りかえすらしい。

4時間後、ずっと俺はがんばったのにメアリーさんはとこと風呂に入り、飯を食べ、テレビを見て爆笑している。

クソ野郎～、いつか見てろよ？

そんな俺も、魔力を広げられたらしい。力の入り方が違う。

「できたっ！」

「ふーん、じゃ次は足ねー」

足もすでに終わっていた。

常人より少し早いスピードでメアリーさんの前に立つた。

「あら、早いわね」

「ちよ、メアリーさん適当じやないすか？」

「メアリーさん？違ひわ、さ、師匠よ。」

「どうでもよひつ……」

「まあいこわ、今日はコソでおしまい。明日は本格的に行くわよ。
もつと上手くなればいいまで……むりー！」

ええ～早すぎ～♪

その夜

悔しかったからかメアリーさんが寝たのを確認し、ずーっと、自分で訓練していた。

「あの子、以外にがんばるわね。私も教えるなら私を超えるくらいに育てなきゃね。」

おきていたのかメアリーはいつ小声でつぶやいた。

目が覚めた。ああ、そうだ。ここは異世界。もつと帰よびる場所はないんだつた。

母さん、何してるかな。父さん、仕事クビになつてないかな。学校の友達、祖父母、親友、前の世界のあるゆるもののが頭に浮かんだ。

昨日までは何もなかつたのに、今日になつてさびしさがこみ上げてきた。

でも、もう遅い。ここで生きるしかないんだ。そう思いながら、体を起こした。涙が出てきた。

「マサヤ君、起きた？」

メアリーさん、いや師匠が呼びかけてきた。とつたに涙を堪え、拭く。そして

「はい、起きてます」

と答える。

もつこいつなつたらここで生き抜いてやる。

「今日は何やるんですか？」

「ええ、今日は買い物よ」

一瞬で緊張感が抜けた。

だつて、本格的つつたのに買い物だよ？

「まずは服。そして食料、あとはまあ安い武器かな。服、あ、学生服やんけw

今更ながらこじだと超恥ずかしいw

で、ここは民宿？を出て一-five分ほどあると商店街についた。ここはある程度のものなら何でもそろっているらしい。

まずは服だが、ここでは、ドラ Hの村人のような服が一般的だつた。といふことで、後は、ご想像にお任せします。

師匠もこんな感じだ。

店の裏を見てみると、黒とも濃い青ともいえる物体が動いていた。すぐに居なくなつたので、気のせいだろうとあまり深く考えなかつた。

「といひで師匠、依頼つて何ですか？」

「何言つてるのよ、あなたまだ戦えないじゃない。」

戦うのかい？

食料市場にて・・・

前の世界の食べ物とほとんど同じだつた。

俺は師匠の買い物を見守りながら、何作るんだ？といつとワクワクしていた。

ここでもさつきの物体を見た。けれどまた気にしなかつた。これがあとあと関係していくとは、昌也は思つてもいなかつた。

続いて武器屋。

剣や槍や槍やり・・・もう何でも揃つていた。
使えなきゃうな枝まであった。

「やうねえ、マサヤ君には体術を極めて欲しいから、この銅い籠手にじよつかしり。」

銅は魔力を比較的通しやすいらしい。もっと上質なものもあるがらしが。

「まあ、今は戦力にもならないし、これにじょつか。」

「酷い、傷ついたw

「さあ、買つもの買つたし、帰ろうか?」

「はい、そうですね。」

昌也とメアリーは、商店街を後にした。

一方さつきの商店街の裏では

黒っぽい青っぽい物体が増殖していた・・・

そのころ、民宿に戻った一人はこんな話をしていた。

「マサヤ君、私はある集団に所属しているといった感じ?」

「はい、それが?」

「これから行動を共にする上で知りなきやいけないこともあります」と思いうの。今から君にはその話をしようと思つわ。」「分かりました。お願いします。」

「私の名前はメアリー・ティーフ。ファーラルという組織の一人よ。メンバーは私を含めて7人で、剣使い、銃使い、魔術使いとか、とにかくいろいろいるわ。」

おかしい。俺、どうみても必要ないw

おかしい。俺、どうみても必要ない。何故俺を？必要ないじゃないですか。何か少數精銳っぽいし。」

「言つたでしょ？」の依頼は一人じゃ無理なの。君の力が必要なのよ。」

「はあ、本当ですか？」

「本当よ？信じなさい。」

意外と疑い深いわね・・・。

その後、3日目、正拳突きなどの基本技

4日目、魔力を流しての基本技

5日目・・・師匠との組み手

「全力でかかってきなさい？」

「はい！」

まずは深呼吸。相手の表情、呼吸、予備動作を全神経を集中して観察する。まずは俺が左足を出し、右の正拳。メアリーさんは軽々かわし、左手で俺の右腕を引っ張り、その勢い右肘を俺の胸に入れようとする。俺はそれをギリギリで右にそれでかわす。

冗談じやない。強すぎる、洒落にならない。

今度はメアリーさんが動く。右手が動いた、と思ったとたんに左手が動き、正確に俺の腹部を捉えた。

俺は思わず悶絶した。

「なかなかいい感じに魔力をコントロールしてるけど・・・まだま

だね。あなたは攻撃を防がれることを考えていなければ、それで力
ウンターを食らつ。次からは気をつけるといいわ。」

「ひひひ・・・」

そのまま丸一日が過ぎた。俺もだんだんと慣れてきた。
でも、やっぱり強すぎた。一回も勝てない。明日から俺も参加だつ
てのに・・・

「今日はもういいわ。ほんとに100分の1ぐらいしか教えられな
かつたけど、明日から仕事よ、今日は早いけどもう寝なさい。」

「はい、おつかれさんした~。」

大丈夫だろうか。

依頼つてどんなのだろ、今までの修行からして、戦うよね・・・
一人不安を抱える昌也であつた・・・

「おはよづ、マサヤ君。じゃあ、まずは依頼の説明ね。この街にベビードラゴンといわれる魔物が大量発生してるの。ドラゴンじゃないわよ?でも、集まるとほんと厄介だから君にも手伝って欲しいの。

L

「手分けして倒そうとこう」とですか?」

「やつよ。それでこれを……」

マサヤは携帯?をもらつた。これで連絡を取り合ひやすい。

「分かりました。じゃあそのベーディングの特徴を。」

「全体的に黒っぽくて、何がなんだかよく分からぬ生命体よ。一匹だと大して強くないけど、集合するとドラゴンのように大きくなる。それが一番厄介なのよね。」

アレジゃん。なつちゅうヤツじゃんW

「これから一週間、君と私は聞き込みを行う。だけど、ベビードラゴンの集合が近いようなならば今にでも動く。だけど、ソレらしい情報が……」

「 もう おめでたし…!」

「！」

「早すぎよ……どうなつてこぬの?まあいいわ。とにかく来て。」

誘われるがままに現場へと駆けつけた。

そこには、ボーリング球ほどの黒っぽい物体が2つ。・・・コレか。

「ちょうどいい。マサヤ君、見てなさい。」

メアリーは足に魔力を流した、きれいな足だなーなんて見とれないと、そこにはもうメアリーはいなかつた。

そして、黒い物体が水平に飛んでいた。

メアリーが蹴ったのだ。畠也も早すぎて（集中してみていなかつたが）捉えられなかつた。

その魔物は、泡のよろに消えていった。

俺もやってみよっ。

幸い魔物は弱い、師匠同様、足に魔力を流し込み・・・一気に距離を詰め、蹴り飛ばした。

まだ死んでないらしく、もがき始めた。そして、分裂した・・・

「マサヤ！早く！そいつらは10体集まると・・・」

周りから魔物が5・6体現れた。一点に集まりグニョグニョと蠢いた。グロイ・・・

そして、人一人ぐらいの大きさになつた。ほぼ球体だが。

「くつ！マサヤっ、行くわよ！」

「は、はい！」

メアリー、魔物の目の前に移動し攻撃を繰り出そうとしている。明

らかにあせつてゐる。

魔物から何本もの手が現れた。メアリーはとつそに退いた。

しうがないわねえ。とつぶやいたのが聞こえた。メアリーの手が燃えていた。魔術である。

一気に距離を詰めて2発、3発、4発と攻撃を繰り出し、退く。魔物の5分の1が削られた。だが周りから魔物がウニョウニョウと寄ってくる。

昌也はその魔物を迎撃する。だが、間に合わない。

10体集結した・・・

一瞬で巨大化した。15メートルはある。黒い竜だ。メアリーさんは冷静になつていた。

「マサヤ君、私、ちょっとだけ本氣出す。」

と言つといきなり雰囲気が変わつた。

魔力の量が大幅に増加したのが一目で分かる。

「いくわよ・・・、ヴォルカラーンス。」

目の前に、炎でできた槍が現れた。ソレを手に取り、まず、集合していない魔物を焼き払つた。

「すごい・・・」

マサヤは思わずつぶやいた。

そんな中、ドラゴンは分裂しうつとしていた。

「させないわよっ！」

槍が一気に10メートルぐらいまで伸びた。

そして、頭を切り落とした。切り落とされたほつの竜は消えた。だが、分裂した方は生き残つていた。

「マサヤー！あなたがやりなさい。」

槍を俺に向かつて投げてきた。

「大丈夫！君にも火属性があるからー。」

槍を受け取ったとき、槍の炎がさらに激しく燃えた。

「 「 」 」

今の俺ならやれる。

一気に腹部に接近、黒い手が伸びてきた。

「くっそ！」

槍ではリー・チが長すぎると、一回手放し、手と足を駆使し、すべて落とした。

そのとき、手足が光つたように見えた。だが、気にしない。すぐさま槍を拾い、腹に突き刺した。どんどん赤くなっていく。それを引き抜き、腹の下を潜り抜け、しつぽを切断する。軽い。振り向きざまに、槍が伸びた。意思を反映するらしい。翼を落とす。

「グググオオオオオオオー！！！」

もはや竜ではない魔物の頭部めがけて槍を投げつける。

音はなかつたが、命中したようだ。頭のほうから泡のように消えていく・・・

勝つた。できた。

槍は消えて、力が抜けた。膝から崩れ落ちる俺を、師匠が支えた。

気づいたら、さつきの民宿だった。寝かれている。

「起きた？」
「声がない。」

「起きたよつね。君は魔力の使いすぎでこうなってる。そのつり良くなるわ。」

「ありがとうござります。と首を軽く曲げる。

「それにしても驚いたわ。あなた意外とやるわね。じいさんが目をつけただけある。」

「じいさん? 誰だ?」

「まあかなり早く依頼は終わっただけど、まずは休むといいわ。そしたら帰るわ。」

「あ、あと君のことだけど、君は、火、雷、氷、土の属性がある。多いわ。そのうち、使いこなせるようになる。そして、君はおそらく、魔力が多いだけではない。何かある。まだ分からぬけどね。」

もしかして、さっき光ったヤツか?

瞼が重くなってきた。もういいや、考えるの面倒くさいわ。俺は意識を手放した。

「なんなの? この子。もはやセンスの塊よ?」

じいさん、やつぱりあなたの目は狂っていなかつた。私はこの子を絶対連れて帰ります。

マサヤの未来を創造しながら、メアリーも眠りについた。

「マサヤ君、準備はいい?」

「OKです。」

「じゃあ、ファイアラルへ行くわよ。」

「はい。」

疲れは全部取れたわけではないが、そのファイアラルとこいつもが楽しみだったので、早く出発することにしてもらつた。
ここからだと約三日かかるらしい。

帰り道の砂漠にて
・ · · ·

「すいません、この前のアドバイスアミターナヤツはだせないんですか?」

「あれはとても魔力を使うのよ。あれは2週間ぐらいしないと使えないわ。わざわざ君のために使つたのよ?感謝しなさいよ。」
言わなきゃ良かった。

「それにしてもおかしいわね···あんなに早くベビークリゴンが集合するなんて···」

俺はまったく知らないのなんとも言えないが、とにかくおかしいらしい。

「君の魔力が関係してるのでかい?」

「それじゃあ俺、厄介者じゃないですか」「普通はありえないんだけどね・・・」

ほんとに俺か??

「そろそろお腹がすいたわね。はい、干し肉。」「硬えー、しかもショッパー！」

「うう・・・」「

「ちょっとしつかりしてよ。これからのお食事はコレよ？これから三日間、こんな生活か・・・

「ふいあらるって何ですかね。」

「ファイアラルは、小さいけどギルドよ。でも、皆が強すぎて、誰も入らないんだけどね。」

「それで今回も依頼つてわけですか。」

「ええ、そうよ。でも本当の目的はそこじゃない。君を連れてくることよが本当の目的よ。」「

俺？

「ファイアラルの長、フォーレルニアっていうんだけど、君の事を見つけて、私に連れてこいって言ったの。」

「そうなんですか。でも俺なんかでいいんすかね。」

「じいさんの目は間違ってなかつたわ。君には素質がある。私にも感じるもの。」

正直、にやけてる。隠せないから下を向く。

「マサヤ君、家族のこととか、友達のこと思い出さない？」

いきなり聞かれて正直驚いた。しかし、思い出すに決まってる。

「実は、君の前にもう一人そういう子がいるのよ。君は覚えてないかもしれないけど、その子は君の事をしつかり覚えてる。」

そういうわれた瞬間、頭の中では、たくさんの情報が飛び交っていた。

昔の友達？

そういうえば、何か普通の日常で違和感があつたような・・・
親友だつたりするのか？
しかも強いのか？

「名前は何でいいますか？」

「思い出して頂戴ね。コウトよ。」

コウト、コウト、優斗・・・優斗！

神崎優斗だ！

「思い出しました。俺が、あいつを忘れるなんて・・・
「しようがないわ。じいさんの魔術はどれも強力よ。」

でも、優斗がいるだけで、どんなに心強いことか。

「会いたい？」

「もちろんです！」

「じゃあ早く帰りましょう。」

「はー！」

優斗、今何してるんだ？

出発から2日が過ぎ、あと丸一日歩けば到着らしい。

すごい疲れた。足が棒のようとはじのことを言ひのだひつ。
メアリーさんの足はほんとに棒のよくなのに彼女自身はピンパンにし
ている。こんなアリだろうか。

「はい、干し肉。」

「どうも。」

慣れといつもの怖いものだ。あんなにまずかった干し肉が今は何
ともない。

それはさておき、遠くに一つの黒い物体が見える、なんだろう。

「マサヤ、魔物が異常な行動を見せた理由が分かつたわ・・・」

「えっ、何ですか？」

「あの人影よ。あれが真犯人ね。」

「何ですかアレ。」

「アレはファイアラルと敵対する組織、ガーディアのメンバーよ。」

近づくにつれて、容貌がだんだんと明らかになつてくる。
黒いマントを羽織り、フードまで被つてゐる。腰には・・・鞄。

「やる気ね。明らかに。」

謎の人間との距離が10メートルぐらいに縮まった。
そしてこいつ言った。

「メアリー・ティーフ、その男は誰だ。妙な魔力を感じる。」

「さあね、あなたこそ誰よ。」

男はフードを取つた。男だ。

長髪で、整つた顔立ちをしている。身長は180くらいか？
剣を抜いた、バチバチと音を立てている。帯電しているようだ。

「マサヤ、ここは私が何とかする。せめて捕まらないようにして。
え？捕まる？ そう思つたとたん、男が魔物を呼んだ。砂漠から手が
伸びている5本だ。

「ケイファンよ。捕まつたらお終いよ。」

ウネウネと寄つてくる砂の手。キモ・・・

「さあ、覚悟はいい？ 男だから容赦しないわよ！ ヴォルカラシス
！」

炎の槍が出現。長物に有利な位置をとる。男はさせまいと、距離を
縮める。そして足を斬りつける。メアリーは飛んでよけつつ、頭部
を貫こうとする。男は右によけ、剣を切り上げる。剣の残像からも
稻妻が見える。

「当たるとまずいわね。」

いつたん退いて距離をとり、突きを繰り出す。すさまじい速度だが、
男はそれを、避け、剣で受け流し、すべて回避した。

メアリーは舌打ちした。異世界移動の際に、多くの魔力を消費した
ためか、思ったように力が出ない。男はそれでも容赦なく斬撃を繰
り出す。さすがのメアリーも、全力が出せないのでキツイ。
「どうした？ そんなものか？」

「くそっ！」

「俺はガーディア第4部隊隊長、グリフ・モーガンだ。」

「知るかつての！」

槍じやキツイわね・・・メアリーは槍を手放した。槍は消滅した。

そうね、相手は雷・・・ここは土はない、砂ばかり。何か・・・何

かなかやるな。今のうちに息の根を止めておきたい。

「させないわよ・・・・・」

猿の拳が飛んでくる。槍の柄で受け流し、そのまま攻撃に転じようとするが、グリフが斬り込んでくる。「これはダメだと後ろに下がる。」「ミロシアの魔物はあなたがやつたの？」

「ああ、お前に早く消えてもらうためにな。だが、そこの小僧、

「死ね。糞猿が！」

メアリーらしくない言葉を放ち、猿と距離を詰める。だが、グリフが邪魔をする。非常に厄介だ。せめて、魔力が全快ならば・・・とメアリーは考える。

猿は拳を帶電させた。「いくぜえ、姉ちゃん。」

メアリー、顔が面倒くさそうだ。

男の前に魔方陣が現れ、そこから人型の猿が現れた。
「なんだ？ グリフ。今回はやばいのか？」
「そんなんじゃねえ、だが、俺一人じゃ無理だ。頼む。」「あいよ！」

「女が・・・・・、来い！ ボルティジ！」

男の前に魔方陣が現れ、そこから人型の猿が現れた。

「なんだ？ グリフ。今回はやばいのか？」

「そんなんじゃねえ、だが、俺一人じゃ無理だ。頼む。」「あいよ！」

無属性、これは金属ではない。この武器がいつ作られたかは、メアリーも知らない。そこまで古いのだ。グリフが近づき剣を振りかぶる、メアリーは見逃さなかつた。正確に腹を突いた。男は不意をつかれ、後ろに吹っ飛んだ。血がポタポタと落ちる。致命傷にはならなかつたようだ。メアリーは距離を詰め、追撃しようとしたが、男は咄嗟に立ち上がり、後ろに下がつた。そして、

「そうだ！ 無属性なら・・・・・」

「エルダージャベリン」「

かなかやるな。今のうちに息の根を止めておきたい。

一方、昌也は・・・

「チツ！何だこいつら！」

苦戦していた。蹴つても殴つてもすぐに再生するらしい。砂があつてこそだが。

「もつと、圧倒的な攻撃力が・・・そうだ！」

メアリーが使っていた槍を思い出した。できるか？

手に魔力を集中させてみた。しかし、ダメだ。ん？また光った。何だ？

適当にケイファンを蹴り、手に魔力を更に集中させた。すると、パキパキと音を立て、手が変色していった。鉄・・・？鉄かはどうかまだ分からないうが、とにかく硬くなっていた。これなら・・・パン！

ケイファンが弾けた。が、再生した。前より小さくなっている。

「へつ！これなら銅の籠手もいらねえや！」

適当に籠手を投げつけ、小さくなつたケイファンを蹴る。すると、もう再生はしなかつた。

いける。

これに属性が加われば・・・だが今はしようがない。やるしかない。魔物は残り4体。魔物は何やら見つめ合い、何かを決断したように中心に集まつた。そして、融合した。

「おい・・・またかよ・・・」

大きい、10メートルはある、黒い竜より強そうだ。そしてまた手が無数に出てくるだろ？。

両手を硬化させた。魔物の形は手がそのまま大きくなつた感じだ。一気に間合いを詰める。魔物はグーの形をとつた。殴つてみたが少ししか削れない。防御力が格段に上がつている。その削つた砂は再生していない。だが、まだまだだ。

これを繰り返していれば勝てる。そう思つた。だが、手は、人差し指を俺に向けてきた。咄嗟に退いた。これは危険だ。人差し指から、圧縮された砂が発射された。

なんとかよけた。弾は小さいが速い。手は、中指も俺に向かう。まずい。

人差し指と中指から、無数の弾丸が発射された。

無数の弾丸が、俺に向かつて飛んできた。まずい、避けきれない。体の前を金属化させたが、全て防げなかつた。一二三発貫通した。痛い。

メアリーさんは遠い。やはり俺がやるしかない。メアリーさんも相当ヤバそうだしな。

手は指を上にむけた。弾を装填しているらしい。力チャカチャとう音が聞こえる。今だ！足に魔力を流し、手に急接近した。しかし、閉じていた小指に弾かれた。なんだこいつ！？

俺もその魔術とやらが使えたらな。

さて、どうする。敵は砂、発砲出来るし、近距離も十分強い。防御力も場合によつて高い。グーになつた時、何かできることはないか？目は手のひらの中だろう。

なら、グーになつたら背後に回ろう。パーになつた時の防御力は分からぬが、グーになるということは、元は防御力がそこまで高くない証拠だ。だが、あの手は360度回転するだろう。打てて三発だろうか。穴が空けばイイが。

ずっと沈黙してた俺に手が痺れを切らしたか、手を拳銃のようにした。新しいフォームだ。コレは強力だろう。

弾はデカかつた。そのためさつきのよりは遅い。かわして距離を詰めた。

殴りかかるうとした。グーになれっ！

だが、まだグーにはならず、小さな砂の手が伸びてきた。どつかの鍊金師じゃないんだから。

どうやらこれを叩かないとグーになつてくれないらしい。仕方ない、

多いけどやうう。

足を取られたらマズイから、まずは足で下の手をける、砂が散る。何時の間にかでが顔の前まで伸びていた。慌てて払いのける。

左足で踏み込んで、左手で手を三つほど壊した。あと七つほどある。腰のあたりから左肩に向けて手が三つある。これは、右の蹴り上げで片付けた。

俺こんなに柔らかかったっけ？
まあいいや。

とにかく残り四つ。本体の指のほうで何かグニョグニョやっている。
時間がない！

残り四つ、左手で手を掴み膝で粉碎。右ストレートで左側の手首を打ち抜く。そのまま左の裏拳で右側の手を破壊。あとは適当に殴つて片付ける。指がこっちを向いた。

指がドリルになつてゐる…！

ズガアアアン！

あつぶね～

間一髪でよけた。穴が空いてるし。

まだ空中でドリルがギュイィィと音を立ててゐる。今しか無い。
俺は手のひらに渾身の右ストレートを入れた。

砂が飛び散った。返り砂？を浴びた。なんか臭いw

穴は空かなかつた。だが苦しんでいる、それは
分かる。右の足の裏で同じところを蹴る。まだ穴は空かない。もう一度右手に魔力を込めた。さらに光沢がました。

「うおおおああ…！」

拳が貫通した。再生してない！

指ドリルの回転力が少なくなつていいく。

最後の一撃か？ドリルが俺めがけて飛んでくる。遅すぎ。俺は華麗に避けようとした。だが、いきなり速度をあげた。そんな知恵があつたのか！

！

とつさに腕をだしてしまった。ああ、もうだめだ。

アレ？

痛い？痛いだけ？

地面に穴が空いたほど攻撃だぞ？俺の腕が耐えられるわけ無い。だから腕はある。この金属？はここまで硬いのか！使える。そのまま力尽きたのか、手はボロボロと崩れる。

終わつた、また勝てた。

闘いか、悪くないな。むしろ楽しい。
師匠、ありがとうございます。

ありがとうござます。師匠、ここに連れてきてくれて。

・
・
・

あつひで砂が崩れてる・・・勝ったのね、マサヤ君
私もそろそろ終わらせなきゃ。

「ケイファンがやられたか・・・せはり今潰せなければ。
「あなたの相手はこっちよー。」

槍で猿を牽制し、視線をグリフに向ける。

猿が槍を払いのけ、メアリーに殴りかかる。

「馬鹿ね。アンタじや私の相手にもならないわよ。どいてなさい。」

顔面に飛んできた拳を紙一重でかわし、腕をつかみ、引っ張る。そのまま膝で腹を打ちつける

「グフジー。」

猿はうずくまつたがすぐに立ち直った。

「なめるなよ、姉ちゃん?」

怒ったようだ。雷の量が違う。どうやら本気らしい。
「こぐゼグリフ。ここにつけ殺す。」

「こぐゼグリフ。ここにつけ殺す。」

「ダメだ、人質にとるんだ。」

やられる前提かい。

メアリーは若干呆れつつも、槍を構えた。腰を低くし、槍の先端をいつでも突き出せるようにする。猿が人差し指と親指で三角形を作つた。

「死にな。ボルトミサイル！」

3発の雷のミサイルが飛んできた。

「だから殺さないと言つてゐるだらうが。」

知るか。こんなんで死ぬわけねえだろ。

一発は避け、槍の尻、先の順に回転させて2発のミサイルをそれぞれ撃墜する。1発目のミサイルが返ってきた。ホーミングか。後ろに反つて避け、蹴りで打ち落とす。

メアリーは驚くほど冷静だつた。

ミサイルもかなりの速さだつたが、そんな短時間で最低限のことを考え、撃破したのだ。

どうしようか、このままだとジリ貧になりかねない。私も何か召喚したいところだけど、魔力が・・・。男もあまり魔力は残つていなはず、だから積極的に攻撃して来ないんだ。やっぱり、まずは猿を片付けないとダメね。

「やるな、そんならボルトミサイル」▽4！

大きい。一倍はありそうだ。

メアリーも、エルダージャベリンに魔力を流す。

全部で6発。いけるか・・・

「黒金の閃！」

槍が空を切った。きれいな一文字が現れた。

ドガアアアアアン！

ミサイルをすべて撃墜した。

爆風によって、猿が吹っ飛ぶ。グリフが駆けつける。

「もういい、出し惜しみしないで、MAXを出せ。」

「分かつてるとつて、いくぜ！ボルトミサイルLVMAX！！」

今度は20発ぐらいあるかしら。20発ね。
これだけの数を一瞬で把握するのは神業だ。

メアリーの目の前に20発のミサイルが接近する。

黒金の閃では防ぎきれない。

左に走る、もちろん追つかけてくる。

「はっはあーこれで終わりだ！」

仕方ない、魔力が少ないけど、これしかない。

エルダージャベリンが赤熱する。そして少し太くなる。

狙いはミサイル、18発！

メアリーの目が、さらに集中力を増す。

「黒金の焰！」

狙いどおり、18発のミサイルが跡形もなく消える。

「まだ2発残ってるぜえ？ミスか！」

メアリーは無視し、ふうと息を吸う。

手を前に出す。

直径30cm程のブラックホールのようなものが現れる。両手に現れたソレは、残りのミサイルを飲み込んだ。

「何！？どうなってやが・・・グハアッ！」

猿が爆発した。猿の後ろにはメアリーが発生させたものと同じもの。そこからミサイルが出てきたらしい。

「ううう・・・」

猿はもう動けないだろ？。なんせ無防備の状態で後ろからミサイルを一発も食らったのだから。

男も、動こうとしない。わざわざ召喚獣に遠距離攻撃をせているんだ。奴は近距離専門だろ？。

猿の背中は無惨に抉り取られていた。鮮血が砂を黒く染める。男は歯軋りをしている。やつと力の差に気づいたか、馬鹿め。

「おい、グリフ・・・ダメだ。もう帰らせろ。」

「くう・・・仕方ない。いつか駆りは返させてやる。それまでしつかり休んでおけ。」

男が何か唱え、魔方陣が猿の元に現れる。そして猿は、光となつて消えた。

「次はアンタね。」

男は仕方ないといった表情で剣を抜いた。「本日だと？」
「刀流だったのか。

「ボルティジがやられるとはな、しかも二つもあつたつと。次はこ

うはいかないと言つていてる。」

「また返り討ちよ。あんなの出来ないほつがマジよ。」

冷たく言い放つた。

男は剣に魔力をこめた。後に抜いたほつの剣が紫色に光る。
剣を構える。

次の瞬間、剣がものすごい速さで伸びた。

剣が伸びた。

「クツ！」

しゃがんで避ける。金髪が頭上でパラパラと舞つた。

だが伸びた剣はうまく操れないらしい。だから猿を使ったのか。
後ろに下がつたら不利だ。それに、伸びた剣は早くは戻らないらしい。ゆっくりもとの長さに戻っている。伸びる長さは自分で決められるのか？おそらくそうだろう。

左手に伸びる剣、右手には普通の帶電状態の剣。
なるほど、伸びる剣が戻る間、右手で時間を稼ぐ、か。

槍で剣が戻る前にと、素早く突きを繰り出す。だが、剣を駆使してすべてかわされる。

続いて、左手を前に出し、槍の尻で男の左側を大きく叩こうとする、男は隙だらけだといわんばかりの表情で左肩を突いてくる。
メアリーの狙いはそこだった。咄嗟に左肩ごと左手を引き、その勢いで右手を出す。左はがら空きなのだ。

槍先の腹で、男を難ごうとする。だが男はギリギリのところで受け止め、右手の剣の一閃を繰り出す。槍の柄で防ぐが、体制を崩されてしまった。

まずい、これでは伸びる剣が！

「チツ！」

「喰らえ！」

「喰らわないわよ？」

メアリーは槍の柄で剣を受け止めた。

切つ先を細い円柱で受け止めるのだ。ほぼ不可能に近い。だがメアリーはやつてのけた。彼女の動体視力、反射神経、集中力には驚かされる。

「何だとおー？」

「あんたじや一生かかつても私に攻撃を当てられないわ。」「クソ……」

男の目が血走る。「この女が！といった表情だ。

ハッタリに決まっているじゃないか。

私だつて避けられない攻撃はある。ただ怒らせたかったのだ。怒つて、判断力を鈍らせる。それがメアリーの狙いだった。コイツはその類だろう。

案の定、引っかかった。

叫びながら剣を伸ばした。上に。そしてその剣を下に振り下ろした。なるほど、こういう使い方もあるのね。だが、叫びながらなんて誰も当たるわけない。

剣の先は砂に埋もれ、それでも雷を帯びているのがわかるほど輝いている。砂が黒くこげる。

馬鹿ね。メアリーは呆れる。誰でもわかるほどわざとらしく言ったがこうも簡単に引っかかるとは。笑いがこみ上げる。そこまでプライドが高いのだろうか。ガーディアの連中にもプライドはあるんだな。

男は我に返り、今起こした行動に対して後悔していた。本当に当たらなかつた。畜生。

プライドも糞もない。本当の馬鹿だつた。ごまかすためにああいう口調をしていたのか、馬鹿だからこそその口調か。それは分からない。剣は相当伸びた。これを戻すには長い時間がかかるだろうとメアリーは確信した。

これで最後だ。と槍に魔力を再度流す。槍が細身になり、先が鋭くなつた。

槍を持ち替え、右手で尻を、左手を先のほうに添える。投げる気だ。

狙いは腹。さつき傷つけたところだ。大丈夫、私なら寸分の狂いなく命中させられる。

感覚をとぎ澄まし、目を閉じる。

男はメアリーが目を閉じるのを見逃さなかつた。

左手の剣を捨てて、一瞬で背後にまわろうとする。

メアリーの背後10メートルの地点にたどり着いた。足に力を入れた。メアリーはそのままだ。

今だ！グリフは猛スピードで近づく。

その瞬間、メアリーが振り向いた。

「！」

槍が投げられた。1mmもズレなかつただろう。男の腹を貫通した。

男は地面に倒れ、じくじくと流れの血を手で押さえ、メアリーに呟いた。

「何故！氣づかれていたというのか！」

「ええ、そうよ。最初から分かつてたわ。」

「心眼とか言つなよ！？」

「見てはいなけれど、空氣の流れのほうが人の位置を正確に把握できるからね。動き出しのときに、あなたがそこに着くことは分かつていたわ。」

「そんな、馬鹿な・・・」

メアリーは伸びる剣の元に近づき、拾った。すごく重い。よくこの剣を片手で支えていたものだと感心する。この剣のことが気になつたメアリーは、男に聞いた。

「この剣、何か他の剣と違うわ。何なの？」

男の姿はなかつた。やられた、とメアリーは唇を噛む。まあ、あんなのいつでも倒せると思つたメアリーは、まあいかと開き直るのだった。

しかしこの剣、剣 자체が生きているような錯覚に陥る。やはり何かおかしい。私は剣の事には詳しくないからな。帰つたらガイに聞くとしよう。

「人は戦い終わり、合流した。

「はあ、疲れたわ。扉のことといい、魔力枯渇状態よ。」「何かスイマセン。」

遠まわしに俺に暴言言つてきた。

「なるほどね、魔力を流すことで体を硬化できる、ね。あのときの違和感はそれだつたのか。」

「金属かは分かりませんがとにかく硬いです。」「今できる?」

「そういわれたので魔力を流してみる。しかし、硬化しなかつた。

「スイマセン。何か無理みたいっす。」

「まあ、あなたが嘘つくとは思えないし、そのうち見せてもらつわ。

「はい。」

「それにしても、ケイファンなんて、どうやって倒したの?」

「硬化させて殴つたり蹴つたりしたら、再生しなくなりました。」

「なるほど、そういう効果もあるわけね。」

「師匠、途中で2対1でしたけど。」

「あんなのハンデよ。それでも楽勝ね。4対1でも勝てたわ。マサヤは絶句した。化物か、と言いたくなつた。

「ところでマサヤ君、硬化させたとき、何か気づいた」とはなかつた? 体が軽いとか。」

マサヤは思い出す、体がやけに軽くなつてきたことを。

「こつもより格段に体が柔らかくなりましたね。」

メアリーは顔をしかめる。何なのよ~と想つてゐるだらう。

「まあ、帰つて硬化させれば、どんな物質からできているかも分かるわ。普通の物質じゃないかもね。」

「あと2時間ぐらいで着くわ。さつきの戦いで結構時間を使つたから、早くしないと口が暮れるわ。」

「暮れたらダメなんですか?」

前の世界では、別に暗くても外にいたが。

「リリには魔物がいるでしょ?」

ああ、そうか。と納得する。

街が見える。ミリシアより大きい。

「ここにファーラルがあるんですね？」

「そうよ。あと30分ぐらいね。路地裏にあるから分かりにくいで。」

街の中に入り、あたりを見渡した。ミリシアより広い。
10分程歩いて、大きな道路に出た。路地裏なんて無数にあった。
これは面倒くさい。

「ここね。」

メアリーは迷う様子もなく路地裏に入つていった。

少し進むと風変わりのドアがあった。ここか。

マサヤが入ろうとしたとき、メアリーは隣の建物に入つて行った。
危なかつた。

俺も急いで後を追つ。

中に入った。割と明るい。ソファーがあり、それを挟むようにテーブルがある。ここで依頼人の話を聞くのだろう。キッチンがあるが、1週間前から放置してあるって感じである。

「結局ここは何屋さんということでしょうか。」

「ジャンルは様々よ。危険な植物の採集、強力な魔物の討伐、場合によつては暗殺なんかもあるわ。」

「暗殺??」

「ターゲットを殺してもいいだけの人間と判断した場合だけね。滅多にないわ。浮気や暴力なんか暗殺の対象にはならない。悪徳者や悪い大臣なんかかな。」

「誰も何も言わないんですか?」

「依頼人には黙るという条件付で暗殺するから大丈夫よ。」

ほんと、何でもありだな。

? 「あつ、メアリーさん早かつたね。もう終わり?」

「ええ、ガーディアのせいだけね。」

・ 「ん、そこにいるのはじいさんの言つてた高校生。

昌也! ! ! ! !

10話 再会

? 「昌也……！」

?の人物は尻餅をついている。
恐る恐る近づく・・・

「優斗……」

尻餅はオーバーだが、親友との再会でそれどころではなかった。
優斗はいまだに起き上がれないでいる。
それでも

「待たせたな。」

「ああ、寂しかったぜ。」

昌也は優斗を起こした。

二人で感動している。メアリーはそれを優しく見守った。

「優斗、お前ここにいつ来た?」

「丁度1年半かな。ここはいいぞ?」

それから一人の思い出話が始まった。

そのじるメアリーは

「じいじ～ん？帰つたわ。」

「ああ、メアリーか。早いな。」

「とこるで、例の少年。連れてきたわ。」

「おおー！少年はだつした。」

「「「ウフ」と話しています。」

「連れて来い。」

「いいけど、昔の親友と盛り上がりたいのよ。」

「知るか！はじめに話すのは俺だらうが！連れてこいや～～～。」

仕方ないわね・・・

「マサヤ～じこさんか呼んでいるわ。」

「あ、はい。すぐ行きます。じゃあ、後でな。」

「ああ、「

マサヤマがつい残し、じさんとのじりくに向かった。

「あの～スマセン。」

「よし、正座。やる。」

「え、あ、ハイ！」

いきなり？！

「私の名前はフォーレルニア・グウィルズ。マスターね。俺は見ての通りの年寄りだから、皆と同じようにじさんと呼びな。」

「は、はーーべつむ。」

「で、君の名前は？」

「始元豊也です。」

「マサヤカ・・・みみこへなー。」

「まこーよひこへお願いします。」

「ヒカル、マウトとせ？」

「はー、マウトが消えるまで親友でした。」

「なるほど、君にも、彼にも何か異質なものを感じたんだが、どうだ?」

「まだ完全じゃないですが、硬化できます。肌を。」

「面白い。今できるか?」

魔力を流した。温かいものが流れるのを感じる。だが硬化まではいかなかつた。

「今は無理のようだな。また今度、じっくりみをせてもらひ。それで、いつなつたんだ?」

「砂漠でケイファンと戦つたときです。」

「ケイファン? いきなりそんなヤツと戦つたのか? ! メアリーは何をしていたんだ!」

「ああ、師匠はガーディア? のメンバーと戦つていました。」

「ガーディアか? ? あとでメアリーに話を聞こう。それにしてもケイファンに勝つたのか。硬化には再生を無効化する効果もあるんだな。 ん? 硬化の効果? マサヤ、俺は天才なようだ。」

俺もそれ考えたんだけど。

「コウトはどうん戦い方をするんですか?」

「まあ、それはそのうち分かるだろう。彼は珍しい属性を持つていでな。魔術のにの長けている。これほどの逸材をとらないわけがない

い。
」

なるほど、昔からコウトは強かつたもんな。

「では、全メンバーを集合させる。それから自己紹介な。」

コウトによると、自己紹介は質問攻めにあつらしい。がんばれつ
見ると、ソファーが3つに増え、1つの椅子がある。そこに俺が座
るらしい。

7人？俺には6人に1匹に見える。

「失礼します。」

俺は椅子に腰掛けた。するとじいさんが

「では自己紹介」

パチパチパチ、皆やつてる。ふざけてるのか。

「えっと、吉元昌也です。よろしくお願ひします。」

「おｋおｋ、それでは改めて俺はフォーレルニア・グウィルズ。よ
ろしくな。次！」

「神崎優斗。ハイ！」

「メアリー・ティーフよ。ハイ次」

「ロイ・ベルデム。はいバス！」

「ライラ・パルキオプスよ。ようじぐ。次！」

「ガイ・ランドルフだ。ほい！ 次

「イグナム。フンリルだ。知恵はそこの馬鹿よりあるから安心し
る。」

ガイ「俺か！ 殺すぞ！」

イグナム「吼えるのはお前の仕事だ——！」

ガイ「吼えるのはお前の仕事だ——！」

じこさん「やめろ！」、新人の前で無様だぞ。」

ガイ「うつせージジイ！」

じこさん「あ？ 今ジジイって言つたなー許されるのはじこさんまで
だ！」

メアリー「やめなよ、じこさんもジジイも変わらないわよ。」

ライラ「やつよ。面倒くさい。」

ロイ「新人が固まつてゐるじゃねえか。どうすんだよ。じこさん、さ
つと進めりや。」

じこわん「お前らマスターへの口の利き方ぐらご……」

フオーレルニアはロイに抑えられていた。

メアリー「じゃあ代わりに私が進めるわ。1通り血口紹介は終わつたわね。じゃあ、質問タイムね。皆、準備はいい?」

皆うなづく。じこわんとロイも戻つている。

メアリー「じゃあ、開始!」

全員手を挙げた。ビリビリ。

じこ「むつ、全員じやな。まあいい、」「はマスターの俺か?・・・

「

メアリー「前の世界で彼女はいたの?」
いきなりヤベえええ!

「え、えと、・・・いません。」

ライラ「うわー、かつここにじやんよ。」

俺は思わず口を向く。

メアリー「あははは!照れてる!」

ガイ「この中の男でこちまんかつじこのは誰だ!…」
なんて質問だ。

男・・・ロイわん、ガイさん、じこさん、コウトか、全員田が光つてこる。何でじこわんが光つてんだよ。ロイさんかな。

「ロイさんです。」

ロイ「おっしゃ——2連勝つ!」「どうやらコウトのときも勝つたらしい。

ガイ「あとで覚えとけよ?」「こいつを見ている。スマセン。

次は、

ライラ「マサヤ君、メアリーと私どもがいい?」

ふざけんな。俺に答えると?

二人とも20代の美女

メアリーさんは金髪のセミロング、身長は170ぐらい。D E力
ツブぐらい。

ライラさんは長髪の桜色の髪、身長は160ぐらい。C Eカップ
ぐらいである。

究極の選択である。まじめに考へてみると、コウトがこいつを見て笑っている。他のメンバーもそつだ。爆笑している。

メアリー「冗談よ!」

殺していいだろ?つか。

ロイ「男の中で、誰が一番強そつかな?」

これは

「ガイさんです。」

ロイ「俺のほうが強いのに！」

ガイ「寝言は寝て言えやー！」

いつもだが、複雑な心境になる。

イグナム「次だ。剣、銃、どっちがの方が好みか聞こいつ。
「銃です。」

即答。だつて強そうじやん。

イグナム「だとよ、ロイ。」

ロイ「お前とは気が合いそうだぜ、今度勝負な。」

ガイ「卑怯にも程があるぜ。」

じいさん「糞ガキどもが、身の程を知れ！まあいい、最後の質問だ。
お前はここに来たことを後悔しているか？」

自身を持つて言える

「はい。」

じいさん「よし、この少年をフィアラルへ迎え入れようじゃないか
！拍手」

パチパチ

ここで、俺の新しい生活が始まる。

その夜、

「なあ、コウト。おまえもこんな感じで入ったのか？」

「ああ、最後の質問で、俺も、はーーーって書いてファイナルの一員になつたんだ。」

「さうか、じゃあ改めて、これからもよろしくな。」

「まあ、せいぜい俺に追いつけるよつこな。ここでは俺が最弱だからな。」

「ならお前なんて楽勝だぜ？」

「」の野郎やつてみゆせ

・・・・

二人はその夜、遅くまで語り合つた。

ギルドメンバー紹介

今回はファイアーラルのメンバーを紹介します

ここでは位が高い順に載せます

名前：フォーレルニア・グワイルズ

年齢：65歳

身長：167cm

体重：57kg

説明：ファイアーラルの長。メンバーからはじいさんの愛称で親しまれている。最近は、年齢のせいで思つように戦えないが、その点を差し引いてもメンバーの中では最強である。よくロイとコントをする。戦いに関しては、何かを極めているわけではないが、メンバーと同じ武器で戦つたとしても、同等に戦うほどの達人である。口は悪いが、メンバーのことを本当に愛している。

「死ねえ！－糞ガキ共がああ！！！」

名前：ロイ・ベルデム

年齢：28歳

身長：184cm

体重：65kg

説明：銃の使い手。膨大な魔力量と属性を持つが、魔術にはあまり適していない。だが、使えるには使える。特別な銃は5つほどしかないが、ノーマルなものと合わせると数は計り知れない。かなりのコレクターで性能が低くとも、プレミア品となればたとえ遠くても買いに行く。銃には魔力を弾として扱う。拳銃サイズのものから、

スナイパー用のものである。じいさんとよくコントをする。どちらかというと、正々堂々ではない。全属性使えるが、コウトの持つ特別な属性は使えない。

「お前らなんで銃のよさが分からねえんだよー！」

名前：メアリー・ティーフ

年齢：25歳

身長：172cm

体重：0kgらしい

説明：マサヤをこの世界に連れてきた張本人。好物は肉だが、太っている様子はない。結構巨ⁿ爆。槍を使い、普段は体術を使う。マサヤの師匠である。ここでの料理はすべてメアリーが行う。肉が中心である。メンバーの中で唯一空間移動を使うことができる。属性は、火、水、土

「ライラ、肉食わないからすぐバテるのよ。」

名前：ガイ・ランドルフ

年齢：22歳

身長：181cm

体重：67kg

説明：剣の使い手。剣を一本持しているが、本人は、あと一本ぐらい欲しいらしい。ロイのようにコレクターではないので、自分の気に入った剣しか持たない。とても好戦的な性格で、戦争のときは真っ先に駆けつける。師匠がいたが、すでにこの世にいない。属性は火、雷、氷、水

ライラ「何であんたこんなに属性あるのに魔術師になんなかつたの？」

ガイ「剣のほうが楽しいじゃねえか！魔術だつてちゃんと使うわー。」

名前：ライラ・パルキオprus

年齢：25歳

身長：165cm

体重：あなたよりは軽い

説明：メアリーとは同じ年で、同時にファイアラルに入った。属性が珍しく、量も多い。ただ、スタミナがないのが弱点。召喚獣を多数呼び出し、護衛させながら、自分は大型魔術を連発するという豪快な戦法をとる。短期決戦派である。長引いたら、召喚獣に適当に任せせる。プロポーションを気にしているらしく、メアリーと違つてあまり肉は好まない。全属性使える。

ライラ「メアリー、ガイが私に変態なこと言つてくれる~。」

ガイ「何で静まり返つてる中で言つんだよーしかも言つてねえよー。」

名前：イグナム

年齢：248歳

身長：？

体重：？

説明：強力な魔物、フェンリルで、じいさんと決闘して負けたらしい。じいさんだけには敬語で話す。普段はペットだが、戦場では、フェンリルらしい、凶悪な無双ぶりを發揮する。属性は闇。他にも幻術を使う。

「じいさん。無理は禁物ですぞ。お前らは存分に無茶をしろ。ん？あつ、頭撫でんな！」

名前：神崎優斗

年齢：17歳

身長：173cm

体重：57kg

説明：マサヤの同級生。マサヤより早く、このファイアラルに引き抜かれた。特別な属性を持っているというが、詳細は不明。

ゆ、「マサヤ、あの店には可愛いい子こいつぱいいるや。」

ま「ナイスだ。今すぐ行こ」ひー・

名前：若元昌也

年齢：17歳

身長：175cm

体重：58kg

説明：この作品の主人公。神崎優斗の同級生。同じくファイアラルに引き抜かれる。まだ検証されておらず、確実ではないが、硬化ができるという性質を持つ。その異質で膨大な魔力にじいさんが気づき、メアリーにつれてくるように頼んだ。だが、魔力が多くても魔術に適してはいないということで、メアリーには体術を習い、これからも教えてもらう予定。属性は火、雷、氷、土

「なあ、ユウト。前のお前の彼女が新しい彼氏作ってたぞ？」

「…まじすか…！メアリーちゃん！殺したい人がいるんですけど前の世界…」

俺は口を押さえた。

マサヤがファイアラルに加入してから1週間がたつた。マサヤは、その1週間、メアリーの指導を受けていた。メアリーに組み手で勝つことはなかつたが。だが、確実に腕は上がり、前みたいに一瞬でケリがつくなつたことなくなつた。

「マサヤ、もうと腰低くしなきや〜、顎も引いて、足は肩幅一隙は見せぢやダメみ?」

「うー、1週間もたつてゐるの・・・」

「まだ硬化できなーいの?」

「ええ、確かにあの時なつたんですけどね。」

「早く見たいわ、どんな物質に変わるのがしら。」

メアリーは宝石を見る気分だが、実際そんな綺麗なものではなく、色の濃い銅のようなものだ。そのうち変わるかもしけないが。

「おこマサヤ、どうだ? 少しありがつたか?」

「あ、ガイさん。どうも、まだまだですよ。」

そのときメアリーは何かを思つ出したかのように元の部屋を出て行

つた。2人ともなんだろうと思ったが、メアリーが戻り、マサヤは納得し、ガイは驚いた顔をしていた。

「これ、何かしら。」
メアリーは、いつか戦つた男の剣を差し出した。それを受け取ったガイの手は震えている。

「こ、これは……！魔剣……か？」

「魔剣？」

「ああ、魔剣というのは、良質な剣に魔物が住み着いたものだ。魔力が小さいもの、気が弱いものが触るとそれだけで喰われる。」

「そんなどい剣だつたのね。あの男、なかなかやるのね。で、ガイ。この剣どうするの？」

「俺が使う。」

は？と2人とも口を開ける。

「ちょうど畠にあつた剣がなかつたからな。これで戦略の幅が広がつたぜ。」

「中の魔物は？」

「んと、んん、ボルテイジ？」

メアリーは苦笑した。まさか剣から召喚してたなんて。

「ガイ、出せる？」

「今はダメだ。傷を負っている。今出せば死ぬかもしれない。」

「その傷、私がやったなんだけどね。」

メアリーは申し訳なさそうにしていた。

「『』の剣何気に重いな。まあいい、じっくり観察します。」

「じゃあ、マサヤ。今日はもうこいつ。自由にしていいよ。」

「はい、ありがとうございます。」

ロイ「なあ、じこわん。」

じい「何だ？」

ロイ「クラウから聞いたんだが、ジーラットが動き始めたみたいだ。」

じい「ほほつ、あの兵士400人持つの闇ギルドか？」

ロイ「ああ、そのギルドが、ハーピィを攻撃しようとしているらしい。」

じい「むむ、正ギルドのハーピィなんかじゃ太刀打ちできねえだろ
うな。」

ロイ「依頼があつたんだ。ハーピィのマスター、プロッサムに。」

じい「内容は？」

ロイ「ジニアットを止めて欲しいことだ。」

じい「さすがハーピィだ。潰せじゃないんだな。」

ロイ「で、どうすんだけじいさん。俺はいつでもいいぜ？」

じい「そつだな、ジニアットが動くまでどんだけあるか分かるか？」

ロイ「1週間ってところか？」

じい「なら、5日後に総攻撃だ。先にコウトを送つて破壊工作をさ
せよ。」

ロイ「目標は？」

じい「ジニアットを4年間行動不能にすることだ。」

ロイ「ならば、マスター、幹部は確実に始末しましょ。」

じい「ああ、それと、ハーピィから援軍はもうえねえか？」

ロイ「その件ではもう話しあつた。援軍は、マスターのプロッサム、

他ベスト3が来るらしい。それでいいか?」

じい「ああ、十分だろ。」

ロイ「じいさんは出るか?」

じい「ジニアットはそこまで強大ではない。お前らで何とかしろ。」

ロイ「まあ、楽勝だが、最近ストレス溜まつてんじゃ・・・」

じい「溜まりまくってるわ、ボケ。腰が動かねえんだよ。今度整体院行つて来る。」

ロイ「そつか、じゃあ作戦は俺が決める。いいな?」

じい「ああ、勝手にしろ。」

12話 会議

ロイ「なら俺が作戦を決める。いいな。」

ジイ「ああ、勝手にしろ。」

ロイ「見てるよジジイ。俺が最強ってこ見せてやる。」

ジイ「銃撃戦で俺にも勝てないくせに威張るなクソが。」

ロイ「腰がイタイイタイなジジイに負けるか。」

ジイ「ビリでもいいから、ひとつとガキ共集めて作戦の説明しろ。」

ロイ「あこやー」

（会議）

ロイ「ええ、まず敵はジニアット、味方はハーピィ。おぐっ。」

皆「クソとつねずく。」

ロイ「そしてジジイは腰痛で行けません。じつとしてるよジジイ？」

？

じい「死ね！イケメンが！顔面潰すぞ！」

ロイ「あなたのような人間は私の半径1メートルに近づいただけで消滅します。」

じい「あああ！！腰いーさつさと動けえやーー！」

2人は、10メートル以上離れた場所で会話していた。

ロイ「続きだ、ハーピィからはマスターのブロッサム、他3人来るらしいが、まだ決まっていない。そのうち連絡する。5日後、ハーピィの連中を含め、ジニアットを攻撃する。4年間再起不能にすることが目的だ。マスター、幹部クラスは確実に始末する。」

メアリー「で、作戦は何なの？」

ロイ「ああ、ユウト。4日後にジニアットの基地に破壊工作してくれ。爆弾は全部で10個、変なところに隠すなよ。」

ユウト「分かりました。じゃあ、仕掛けるところは、トイレに爆弾を5つ分、倉庫に2つ、集会所に2つ、あとは管制室に1個ですかね。」

ロイ「トイレはいい、他には、最上階に適当に1個、集会所にもう1個、残り3個は兵士格納庫だ。それでも兵士は全滅しないだろうが。」

ユウト「分かりました、4日後ですね。」

ロイ「ああ、頼む。それとマサヤ、お前の硬化とやらは使えそうだから、5日後までに何とか完璧に使いこなせるようになつて欲しい。」

マサヤ「分かりました、がんばります。」

ロイ「それと、救いよつのない馬鹿だが、何か剣増えたらしいな。使えるか?」

ガイ「まだだ。だがそれは住んでる魔物が弱ってるだけで、そのうち使えるよつになる。」

救いよつのない馬鹿に反応しなかつた。自負してゐのか?

ロイ「メアリー、約1週間、肉料理は少し抑えて、健康によい食事に変えるよつに、空いてる時間は自力で魔力をねつてくれ。」

メアリー「・・・分かつたわ。じゃあマサヤ、あなたもそつき言われたとおりに硬化を使いこなせるよつにしなさい。」

マサヤ「心得た!」

ロイ「次、ライラだ、お前は肉食つて、後はメアリーと同じだ。あと、サプリメント飲め。」

ライラ「うん、結構魔力使いそつだし。」

ロイ「イグナム、お前は何でもできるが、幻術を使って400人に及ぶ兵士に集団催眠をかけろ。そして、できるだけ動きを止めろ。」

イグナム「つまらんな。」

ロイ「文句言つた。」の犬が、あそこには弾ぶつ放すぞっ。」

イグナム「俺も幹部とかとやりたいんだが、」

ロイ「前やりせてやつたろ？それもつまらない戦いだつたじゃないか。」

イグナム「チツ」

確かにそれはつまんねえだろ？なウズウズするつて。

ロイ「イグナムを除いてこれは準備の段階だ。今から本戦の作戦を説明する。いいな。」

イグナム以外は頷く。

ロイ「ジニアットのマスターは俺とブロッサムが叩く。あとは適当に会つたやつとやれ。だが、幹部クラスの敵の数は分からない。皆、携帯は持つているな？誰かから何か聞き出せたら連絡を取れ、いいな？」

ガイ「とにかく、ジニアットとハーピィって何なんだ？」

メアリー「ジニアットは闇ギルド。不正ギルドのことね。最近妙に調子乗つてるの。」

ライラ「ハーピィは、討伐よりも、採集や貿易が盛んなギルドよ。だけどマスターはそんな弱いギルドを守るために、毎回強いわ。ブ

ロッサムももちろん強いわ。」「

ロイ「俺とブロッサムがやるんだ、マスターは安心しろ。問題はマサヤだ、お前は誰かについていけ。」「

メアリー「そうね、じゃあまた私が受け持つわ。」「

マサヤ「了解です。」「

ロイ「それとユウト、お前はガイと行動しろ。剣が怪しいからな。もしものときは頼む。」「

ユウト「はい。ですよ、ガイさん。」「

ガイ「ああ、頼むぜ。」「

ライラ「で、私は?」「

ロイ「お前はハーピィの2人だ。あと一人はイグナムの手伝いだ。ハーピィは回復系統が多い。ブロッサムは超攻撃型だがな。そいつなら魔力回復も行ってくれるだろう。」「

ライラ「分かったわ。それなら安心ね。」「

イグナム「いらねえし、人間なんて。」「

拗ねている。ロイは無視する。

ロイ「これで一通り終わったな。もう一度言つ、作戦決行は5日後。ユウトは4日後ジニアットに破壊工作をする。ガイとユウト、マサ

ヤとメアリー、ライラとハーピィ2人、イグナムと残りのハーピィ、俺とプロッサムで行動する。ハーピィのメンバーは後日連絡する。以上だ。何か質問は?」

ロイ「ないようだな。さすがは俺の完璧な説明。それじゃ解散。」

皆はそれぞれの課題にとりかかった。

作戦決行まで5日

13話 ハーピイメンバー

ジニアツトを攻撃する作戦の会議から3日目だ。

ユウトは明日に作戦を開始するので念入りにイメージトレーニングをしていた。

そんな中

ロイ「おい、お前ら、集合だ。ハーピイの連中が来たぞ。」

ガチャリとドアが開き、入ってきたのは4人の女性。1人だけ特に美しい。

ロイ「聞こえねえのか？集合。」

皆ダラダラと集まる。

ロイは、ハーピイの人たちに謝っている。気を悪くしないでくれ、と言っている様だ。

皆は、そんなロイを見るのが楽しいのだらう。

ロイ「はい、じゃあ我々がジニアツトを攻撃するにあたり、ハーピイから援軍が来ることは説明していた筈だ。それで、4人に来ていただいた。すみません、自己紹介お願ひします」

ブロッサム「ええ、もちろん。私はブロッサム、ハーピイのマスターよ。久しぶりに戦えるわ。皆ニフようしくお願ひします。」

マサヤ（ハーピイのマスターが好戦的って……）

シユバリヒ「私はシユバリヒ、今回はライラさんと一緒に行動させていただきます。どうぞよろしく。」

リップ「リップです。私も同じくライラさんのサポートをさせていただきます。よろしくお願いします。」

二人が深々と頭を下げたので、ライラも会釈する。会釈かよ。

サフィア「サフィアです。今回はイグナムさん・・・アレ?」

イグナム「ここだが?」

サフィア「ああつースマセンーでも、ちゃんと役に立ちますー。」

イグナム「・・・」

また拗ねた。メアリーが頭を撫でると怒り出す。

ロイ「サフィアはイグナムと相性のよい魔術を使うんだったな。お前も幻術か?」

サフィア「いえ、私は幻術は使えませんが、幻術を具現化することができます。つまり、イグナムさんが誰かにドラゴンに襲われているという暗示をかけます。そうすれば、私はその人からイメージを汲み取り、ドラゴンを召喚します。しかし、長くは顕現していられません。10秒が限界です。」

ロイ「だそうだ、イグナム。」

イグナム「少しばらうよつだな。足手まといにはなるなよ。」

サフィア「はいっ！」

ガイ「なあ、ロイ、ブロッサムってヤツ滅茶苦茶強いんだろ？ほんとかよ？」

ロイ「メアリー、魔力はどのくらい元に戻ったんだ？」

メアリー「やつと半分ね、まああと一日でほぼ全快よ。」

ガイ「あの、ロイさん？」

ロイ「ライラは？」

ライラ「私はもう十分よ。今からでもいけるわ。」

ロイ「ならよかつた。」

ガイ「ねえ、ロイさん？きいて……」

ロイ「シユバリエ、リップ、お前たちはライラの魔力が常に全快であるようにさせてくれ。」

2人「分かりました」

ガイ「ねえ、……」

ロイ「ブロッサムさん、あなたは私と行動です。よろしいですか？」

ブロッサム「ええ、がんばりましょ！」

野郎！人一

人の話ぐらい聞いてやれよ！――」

自分のことかよ、とマサヤは思った。

ロイ「マサヤ、どうだ？ 硬化はモノにできたか？」

マサヤ「ええ、2回に1回は成功します。」

「 つか、じゃあ依頼が終わつたら披露だな。そのときに他の奴らのも見せてやる。あれ? ガイ、どうしたんだ? そんなに疲れ切つて。」

ガイ「何でもあらへんよ・・・」

投げやりになつてゐる。しかもなぜか話し方も変わつてゐる。

ロイ「コウト、準備はいいか?」

「カウトはい、いつでもいけます。」

「ではプロッサムさん、作戦は明後日です。明後日の早朝、一九二六年もう一度お集まりになつてください。」

「プロツサム」「分かつたわ。」

「では、これで決定です。また明後日会いましょう。」

ハーピイの人たちはドアを開けて帰つていつた。

ロイ「これはチャンスだ。俺としても、じいさんとしても。
イとは友好を築きたい。ミスは許されない。いいな?」
「

14話 ノウトの先攻

4日目、朝3時、ノウトは起きた。

「いよいよだな・・・。つまくいっててくれよ?」

ノウトは自分の手を握り締める。

「行くか。ロイさんが地図を確か「ココに・・・あつた。」

東に10キロ、以外と近い。

「今回も頼むぜ?ヴェステアーロン!」

大型の鷹のよくな獸が現れた。全體的に色が暗い。ノウトの1・5倍くらいの身長がある。

「お、ノウトじゃねえか。2ヶ月ぶりか?久しぶりだな。」

「ああ、今日はジニアットに行く。東南東に約10キロだ。」

「任せな、乗れ、早く行くぞ。」

「ああ、頼む。」

ヴェステアーロンは巨大な翼をはためかせる。風圧がものすごい、家も吹き飛ばしそうだ。背中にノウトを乗せたヴェステアーロンはジニアットを目指して飛び立った。

ロイ「ユウトは行つたな。よしよし、任せたぞ。」

メアリー「あの子の能力はほんとに使えるわね。私も欲しいわ。」

マサヤ「ユウトはどんなことができるんですか？」

ロイ「ん？あ、そうか。ユウトはね、聞いたことない属性だが、影属性というものを使うことができるんだ。影属性というのも、俺らがつけたんだけどな。能力は、影を伸ばしたり、実体化させたりなどどれも強力極まりない。それを見つけるじいさんの目も脱帽だよ。あれは100万人に1人の逸材だ。」

なんか巨人的なこといつてる。

マサヤ「そなんですか。でも影つて・・・」

SHDEゴウト

森の上を飛んでこるが、まだジニアッシュのものは見あたらぬ。

「なあ、間に合つか？あと少しで朝だぞ？」

「ああ、ぴつたりだ。お前は影が無いとダメだからな。朝になつた瞬間にちやちやっとやんなきやな。」

「あんまり遅いと気づかれるからな。」

森を越えると、黒い建物が目に入った。デカイなんじやありや、爆弾10個で足りるか？まあ、ロイさん特製だから侮っちゃいけないだろうけど。それにしてもこんな握り拳くらいのちやつちい爆弾がねえ・・・。

「ゴウト、あれじゃねえか？」

「ああ、想像以上にでかいな。最上階は何回だ？7階か？兵士格納庫も馬鹿でかいぞ。」

「はい到着～。」

「ありがとな。ヴェステアーロン。どつか隠れててくれ。」

SHIMADA

「ハハハハハハハ

手が光った！ まだ。 確実に上達している。 こしても硬いな。 神経
通つてんのか？

明日までになんとか完成せねば・・・。 つまへこねばここねび。

SHIMADA

ここか、 真っ黒だ、 しかも結界が張つてある。 なるほど、 誰にも気
づかれないので。 ロイさんはどうやつたんだろ。 あ、 じいさんか。

「ブラックミスト」

影が霧散し、爆弾を包む、真っ黒に染まつた爆弾は宙に浮いた。

ל-ב

爆弾が一斉に飛び立つた。1つは頂上、倉庫に2個、集会所に3つ、管制室らしき部屋に1つ、残りは兵士格納庫へ、それぞれ飛んでいった。

コウトは目を閉じ、爆弾に意識を憑依させた。

ほうが見つからない。兵士格納庫か、中も広いな。でもイグナムなら楽勝だろう。かわいそうに。3つか、やっぱトイレに1つしかけよう。誰か丁度よくいるだろ？ あとは朝食を食べる食堂、天井でいいな。管制室、誰もいないが、油断はできない、慎重に壁を伝い、いすの下に仕掛ける。倉庫はもう仕掛けた。集会所、1人がこっち向いた！ まずい、俺は爆弾で男を殴った（ユウトは外にいる）。男は倒れた。ダメだ、やりたくはなかつたが殺すしかない。爆弾を包む影の1部を尖らせる。不安定になるが仕方ない。勢いよく男の胸を貫く。男は苦しみ、息絶えたようだ。やってしまった。男の胸からは血が噴出し、床を染める。すまない、本当は明日の予定だったけど。いやあ、血が垂れてるな。仕方ない、この上にするか。上の目立たないところに爆弾を仕掛ける。あとは台所と掲示板の裏だ。あとひとつ、最上階に仕掛けた。柱が脆そうなところに。一気に崩れてくれよ？

コウトは意識を戻した

「ふう、一人やつひまつたか。しうがねえな。それにしても、もう何の罪悪感も残らねえな。俺も変わったな。」

「ヴェスター・ロン、帰るぞ?」

「終わつたようだな。ああ、帰ろ。」

ヴェスター・ロンは、俺が影属性をモノにしたときに現れた俺の召喚獣だ。

「完璧とまではいえねえが成功だ。」

コウトはベスター・ロンの背中に乗り、飛び立つた。フィアラルに向かって。

「で、できた・・・！」

マサヤの腕は輝いていた。

SHADEマサヤ

「できた . . . !」

マサヤの腕は光沢感が出て、いかにも硬そうだ。メアリーは近くにいたので、すぐに気がついた。

「！ やったわね、いつもと光り方が全然違うわ。これなら明日は大丈夫そうね。」

メアリーはそういう、ロイの元へ向かった。

やつた、ついに硬化をものにした。これは本当に硬い。普通の人間じゃ、1パック殴つただけで意識が飛ぶだろう。なんせ、ドリルまで耐えるのだから。

ロイ「ほう、これが硬化か。確かに硬そうだ。だが . . . ほい！」

腕の一部が簡単に崩れた。崩れたと言つてもほんの×2少しだが。ロイ「ははははー魔力には強くないんだなーちょっと待つて。すぐ鑑定してやる。」

マサヤの腕の一部はロイに持つてされた。硬化を戻すと、そこは擦り傷みたいになつていた。血も出でたし、だんだんと痛みを感じてくる。え？ 硬化って大したことない？ いやいや、そんなことはない . . . よね？

まあ、でもこれで格闘技を有利に進められる。

ロイ「マサヤ、俺はこんな物質見たことねえ。金属だが、金属ではあり得ないような強度を持ち、それなのに魔力装甲がなく、また張ることもできない金属なんて。」

とここん魔術はダメみたいだな。

ロイ「おいーガイ！ちょっと来い！頬みがある。こいつの腕を剣で叩き落してくれ。魔力はなしだ。」

ガイ「！？いいのか？」

マサヤは嫌そうに頷く。だつて痛いもん。斬れないことは分かってるけど、衝撃は多少軽減されるが、無いわけじゃない。まえのドリル攻撃ではそんな感覚だった。

ガイ「斬れても悪く思つなよ。ラアッ！－！」

ガキイイイン！

マサヤ「痛つてーーー！」

腕に外傷は無いが、確かに痛そうだ。皆は苦い顔をしている。

これ、やっぱ使えんじゃねえ？しかも、まだなんかある気がする。

SHIDEコウト

あと30分くらいか．．．今回は1人殺つてしまつたが、前は7人だからいいほうだろう。バ lenakiやいいが。まあ、トイレは見破られないだろう。ちなみに、あの爆弾は、人間が触ると爆発する。また、ロイさんの合図でも爆発するようになつていてる。誰かが、何だこれ。と手にした瞬間あほんだ。

さらに、一つ爆発すると全部爆発する。名にも出来ずに見てるしか出来ないだろうな。

予定では、今日中に爆弾が作動する。あくまでも人間が触れたら爆発だから、獣や魔物が触れたつて爆発しない。まあ、処理する方法はない。ロイさんが来いと言つたらくる爆弾だからだ、解散は出来ないらしいけど。

SHDEマサヤ

ロイ「くつ一ダメだ。魔力装甲が全くかからない。ある意味これダメじゃね?」

マサヤ「え、でも自分から魔力は流せますよ?」

ロイ「だが装甲は作れないじゃないか。つまり、魔術が弱点という事だ。」

この世界でこんな能力・・・何か、魔力無限とか、超珍しい属性がたくさん使えるとか、がよかつたなあ。

まあ、金属もかっこいいよな笑

ロイ「だけどそれも特別なんだぞ?俺はそんなの見た事無いからな。ちゃんととした利用法を考えろよ。」

特別?俺の厨一病がドクンと脈打った。ちゃんと奥義とか作りつゝ

ジーマットにて

「はあ、ここの訓練意味わかんねえよ。」

ジーマットのある兵士らしき人が愚痴を言いながら、なんとかつき爆弾を仕掛けたトイレへと入って行った。

「ふんんこゆうつーああ出た。ふう、もうここの兵士もみゆつかな、面倒だし。マスターは俺らの事どう思つてんだ。」

「えつと、ケツ拭いて、流す・・・アレ?なんだこれ、ん?」

ウンコマンは、近くにいる友人を呼びに行つた。

到着したウンコマンズはその爆弾らしきものをマジマジと見つめた。はたして、触つてもいいだろかと。すると、ウンコマンズAが誰か持つてみて、と言う。ウンコマンズABCDEは皆顔を見合わせ、首を振る。先程ウンコマンになつたCが、仕方ねえなど、手を伸ばす。それをウンコマンズはマジマジと見つめる。トイレの中で、ウンコマンズが5人。しかも糞を処理するようで、爆弾らしきものを処分する。なんとも滑稽だ。

「じゃあ行くぞー、・・・よつと。へ、うわああ~。」

ドカアアアアアン?

ABCDE 「おおあああー?」

ウンコマンズは

その爆発をもろに食らつたので当然木つ端微塵になつた。

同じく、他の場所でも爆発が起つた。

マスター「いよいよ攻めてくるのか。でもここまでしなくても。泣」

SHADEコウト

あ、早え、もう爆発してやがる。

「ヴェステ、爆発したみたいだ。」

「え、早。どんだけだよ。大したことねえじゃん。」

「いや、それだけじや分からねえだろ。どつかのバカな集団がやつたんじやないの? でもあれが爆発したなら一〇〇人は死んだよな。」

トイレかなー、

トイレかなー、ワクワク

「着いたぞー」

「ああ、ありがとな。」

「コウト」「ロイさん、終わりましたよ。コウト君帰りましたよ。」

「ロイ」「ああ、つうか何だお前その口調は。」

「コウト」「爆弾は既に爆発しました。」

「ロイ」「そつか、じゃあお前は寝ろ。」

ジーマット攻撃まで

1日

作戦決行日、朝4時

ロイ「起きたか？皆。」

皆格好がいつもと違う。

ロイさんは、青色のマントを羽織り、腰には3丁の銃。背中には銀色のボディに銃口にバレルのようなものを取り付けたショットガンを背負っている。腰の3丁の銃は、よく見えないが、異様なものを感じる。おやぢられらが、靈獸、魔銃と呼ばれるのだろ？

メアリーさんは既にエルダージャベリンを出現させている。
その他、準備可能なようだ。

ライラ「あとはハーピィの人たちだけね。」

ライラさんは、桜色の髪を、ポニー・テールにしている。
メアリーさんといい、ライラさんといい、タイプは真逆だけど美しそう。

ブロッサム「入るわよ~」

ロイ「来ましたか。もう私たちは準備が整っていますが、貴方たちはもう出発してもよろしいでしょうか。」

ブロッサム「ええ、行きましょ~。」

各々外に出る。

ロイ「じゃあプロッサムさん、何か鳥獣型の魔物や精霊は召喚できますか？」

プロッサム「ええ、当たり前よ。私たちはそれに乗るわ。クライイン！」

雷を纏つたフクロウが現れた。頭にはズレているが「冠をかぶり、首や尾には装飾が施され、背中にはジェットコースターにあるようないすが並んである。2メートルほどの大きさで、薄い緑色をしたフクロウは4人を乗せた。

ロイ「ハーピィは大丈夫なようだな。それにしてもすごいな。あの大きさのフクロウを召喚するなんて。」

ガイ「どうでもいいから早く出してくれよ。」

ロイ「ああ、そうしよう。コウト、何人いける？」

コウト「4人ですね。」

ロイ「分かった、じゃあコウトにはマサヤ、メアリー、ライラが付いていけ。」

ロイ「残りは俺について来い。頼むぜ、麒麟」

魔方陣から馬より少し大きいくらいの首の長くないコニコーンが現れた。足からは赤い炎を出し、尻尾はもはや炎だ。全身が赤い麒麟

は2人と1匹を乗せた。

ロイ「じゃあな、じいさん」

3匹の召喚獣は飛び立った。

メアリー「着いたわね」

そこには、見るも無惨な黒い建物、ところどころ大穴があいていて、たまに赤が見える。血だろう。

ユウト「おわ〜、スゲ」

ロイ「ここからは前言つた組で行動してもらつ。いいな? 誰一人として欠けてはならないのがフィアラルだ。ハーピィを守るとともに、

生きて帰つて來い。まだ16話なんだぞ。」

マサヤ「16話?」

ロイ「解散~」

sideイグナム・サフィア

さ「すごい数の死体ですね。」

い「あの爆弾は強力だからな。作戦を始めよう。」

イグナムは普段の子犬サイズから一気に大きくなり、背中が人間の頭ぐらいの高さまでになった。サフィアは呆然としている。

い「ダーク・ゾーンを張る、その間にお前は片っ端から具現化させてくれ。中身は死神だ。」

さ「死神ですね。まあ言ってくれなくてもよかつたんですけど、こっちのほうがイメージを掴みやすいです。」

い「準備ができたよだな。ダークゾーン!」

イグナムを中心として、薄黒い波が広がっていく。それに触れたものたちは、いきなり何かを見つけたようにビクッとなり怯えるようにして後ずさる。

さ「かかりましたね。夢幻地獄。」

サフィアの表情が変わった。あんなに明るい顔をしていたのに、沈みきつた顔をして、目が濁っている。

イグナムはサフィアの魔術に驚いていた。自分の想像していた死神がそのまま現れたのだから。骸骨に黒いマント、鎌を持つものもいれば、銃を持っていたり、杖もいる。すごい、これがサフィアの魔術か。想像以上だ。

さ、「イグナムさん、多分、この人たち皆死にます。弱すぎますって。

」

s·i·d e ガイ、ユウト

ガイ「つまんねえな。どいつもこいつも、雑魚過ぎるぜ」

ユウト「そうですね。何かどでかいの来ませんかね。」

ズガアアアアアン！――！――！

「「――」」

壁が突然爆発し、その中から、3頭の魔物が現れた。その後ろには、人間。

「へへ、俺らのギルドをこんなにしゃがって、殺すからな。」

楽しそうに躍つゝ身長150センチくらいの科学者らしき人物が現れた。

ガイ「俺らも退屈してたんだよ。」

コウト「来ましたね、ほんとに、」

この2人も楽しそうだ。

魔物が3体。赤、青、黄色の鬼だ。角がそれぞれ2本ずつついていて、目が光っている。赤は棍棒、青は剣、黄色は弓を持っている。しかも身長がガイの2倍くらいある。

「私の名前は、サウスター・アリッジ。このギルドの最高科学者です。そして、第2部隊隊長でもあります。うへへ」

ガイ「鬼か、強そうだな。ちょっとだけ」

コウト「いや、もつとちょっとじゃないですか？」

サウスター「君たち、誰が3体といいました？奥をご覧なさい。」

「――――」

奥には鬼が約30体。その奥には一番テカイ黒鬼がいる。

コウト「これだけ多くの鬼を従えるつて、お前……何者だ？」

サウスター「全部私が改造しました。まあ、なに言つてるか分かりま

せんよね。」

ガイ「改造くらい分かるつて。」

s i d e ロイ、プロッサム

2人は所長室へと向かっている。そんな時、

「ちよつと待ちなあ、いい感じのお一人さんー。」

プロッサム「誰？殺すわよ？」

「おお～怖え、俺の名前はボシキ・リヤン。第4部隊の隊長だあ。」

赤く短い髪に、ヤンキーみたいな口調で話しかけてくる男。30歳くらいだろうか。いい歳こいて、何やってんだか。

プロッサム「ボシキね、私が殺るわ。ロイさん、あなたはマスターを狙つて。」

ロイ「ああ、貴方なら楽勝ですよ。では、任せましたよ。」

そう言い残し、走つて去つていった。

プロッサム「行つたわね。これで私もちゃんと力が出せるわ。覚悟しなさい？」

sideイグナム、サフィア

い「おい、今なんて言つた？」

さ「だから、全員死にます。」

こんな性格だつたのか？あの魔術を使ってから何かおかしい。ビリ
い「ことだ？」

さ「こんな弱いやつと戦うために私は人間のところに来たんじゃな
い。もっと強いやつと・・・もつと・・・足りないわ。」

・・・・・・・・・今、何ていつたんだ？

17話 亂戦（1）

今、何ていったんだ？

人間？弱い？もっと強いやつ？

・・・・！

もしかして、人間・・・ではない？

い「お前つ！何者だ！」

さ「あははは、弱いわ。ハーピィには強いマスターがいるから入ったものの、マスター以外超平和主義者でさー、」

い「だから、お前は何なんだ。」

さ「ああ、あたし？あたしはサフイリア・シム・グラフィ。

い「それが本当の名前か、それと、正体を見せろ。」

さ「ええ？あたしと戦ってくれる？」

い「何を言つんだ。今は仲間だ。そんなことはできない。」

さ「へえ、じゃあ・・・

サフイアことサフイリアが腰から剣を取り出す。そして超人的なスピードで近寄ってきた。

い「何！？」

sideガイ、ユウト

ユウト「いや、でもいけんじゃないっすか？」

ガイ「まあ、そうだよな。たかが鬼だもんな。」

2人は落ち着いているが、頭はフル回転している。さすがに30体近くを相手にするのは厳しいようだ。

サウスター「あの～、いいですか？」

ガイ「あっ、すいやせん。どうぞ？」

サウスター「はい、じゃあ続き。行けええ！！鬼軍団ーーその2人を蹴散らすんだーー！」

鬼たちは一斉に動き出した。ユウトとガイは構える。

赤鬼がユウトに向かつて走り、棍棒を振り上げる。ユウトは右に飛んで避けた。さらに、黄鬼が放った矢が飛んでくる。ユウトひ舌打ちし、極太の矢を転げてかわす。そして起き上がるとともに赤鬼に接近し、

「シャドウウェポン・ソードー！」

コウトの背後に灰色の剣が4本出現する。そして、赤鬼の左足に飛んでいく。

そのすべてが刺さり、血が噴き出す。鬼は悲鳴をあげて倒れた。続いて、コウトは黄鬼に向かつて

「シャドウウェポン・アーム！」

影が拳の周りを包む。左手で右手首をつかみ、右手をパーにする。そして右手を黄鬼の腹に向ける。黄鬼がコウトを蹴ろうとした瞬間、コウトは左手に力をこめる。すると、右の手のひらから黒い炎の弾を発射した。ダン、ダン、ダンと命中し、鬼の腹に穴を開けた。血が噴き出す中、機械がチラツと見えた。

「ほんとに改造されてんだな。」

ガイは、青鬼2体を相手にしていた。

ガイ「この靈劍ウォールニアはそんな軽い剣じゃ、刃こぼれひとつしないぜ！」

水色の光る剣が、青鬼の剣を受け止め、弾く。ガイは、かかつてこいよ。と挑発している。青鬼は2匹同時に上と下に斬撃を繰り出した。ガイはしゃがみながら飛び、下の刃に乗った。そして、そのまま剣とともに上空に上つた。一番上にたつしたところで青鬼の顔面に飛び移る。もう一方の青鬼がガイに向かつて剣を振り下ろす。ガイは笑つてもう一方の青鬼に飛び移る。だが、剣はとめられるはずもなく、青鬼の顔面を真つ一つにする。脳のところは完全に機械だつた。ひでえことしやがるぜ。ガイは剣を青鬼の頭に突き刺した。返り血を浴びたガイは、きつたねえ、と汗をぬぐうように腕で額を拭く。

「おい、チビ！なんでこんなことしたんだ！鬼たちにも人生・・・いや鬼生つつうものがあるだろ！」

サウスタは聞こえているのか聞こえていないのかまったく動じない。赤鬼と青鬼が同時に襲つてきた。剣を一振りすると赤鬼の拳が切断され、手首から先がなくなつた。右手で左手首を押さえて蹲つている。青鬼はその隙に背後へ回り、剣で突きを思い切り繰り出す。ガイはそれを紙一重でかわし、懷へ潜り込んだ。剣を突きの構えに変えて、上を見る。青鬼のデカイ顔がガイを見下している。

「ブルー・アクエリアス」

剣が大量の水を纏い、その水が細く鋭くなるように変形し、ランスのようになつた。

「スピア・アクアウェイブ！」

剣は青鬼の顔面を正確に突いた。

ユウトは、赤鬼と黄鬼×2を相手にしている。

「シャドウエポン、ソード！」

今度は前に6本の剣が出現し、サークル状になつた。そして、黄鬼から飛んでくる矢を防ぎきつたところで、左手で右手首をつかみ、右腕を前に出す。すると、剣は1本ずつ鬼に向けて飛んでいった。

「はあ、何か、改造鬼つてやる気が・・・」

つまらなそうに1体ずつ片付けていくガイとユウトであったが、ユ

ウトは黄鬼に飛び乗ったところで、黄鬼の頭から何か聞こえた。

ハハハハハハハハハハ

ペーぺー

黄鬼の顔が膨らみ、爆発した。

「ハハハ…シャドウウェポン・ダークバリア…！」

コウトの前に黒いバリアが発生し、爆風を防いだ。なんだこいつ等。自爆までするつて言うのか。それとも、サウスタがやつてるだけか。黒鬼はどうか悲しい顔をしている。

すると、黒鬼が何かふつされたように立ち上がり、拳を振り上げた。そして振り落とした。

サウスタに向かつて

s a d eイグナム、サフィリア

「あはは、いいわ、久しぶりだわ。この感覚…」

「お前、その姿…魔人だったのか…！」

「ええ、そうよ。正確には魔女ね。さあ、ちゃんと殺す氣で来てよ

？じゃないと・・・死んじゃうよ？」

サフィアは不適に嗤い、剣を捨てる。

「せっかくだから、あなたとは魔術で勝負したいわ。」

「いいのか、私はフェンリルだぞ？」

「だから殺す氣で来てつていつてるでしょ？」

サフィアは息を吸い込み、落ち着いた表情に戻った。そして

「ヘルブレス！」

口から黒いブレスが発射される。イグナムは

「チツ、ブラックミスト」

暗い霧が立ち込め、サフィアは一瞬戸惑う。なんせ彼女には、イグナムに囲まれているように見えるからだ。これは、幻術。わたしに、こんなもの・・・？解除できないだと？

「どうだ？解除できないだろう？最初からおかしいと思っていたんだ。なぜ俺につく必要があった、なぜ人間にはありえないような魔法が使えた？それは、お前が人間じゃないからだ。だから私はこの魔術を対人用から対魔用に調整したんだ。どうだ？わかったか？」

「くうう、あたしだって魔女よ、甘く見ないでよ。スパイラル・ダス・エフェクトオ！――！」

暗い霧が一瞬にして晴れた。

「夢幻地獄！」

イグナムの前に、3対の死神・・・

sideロイ

ブロッサムさん、頼みましたよ。

それと、イグナムは始まつたかな。ブロッサムさんが、彼女は魔人だということを教えてくれなかつたら今頃イグナムは・・・ロイは携帯電話を取り出し、メアリーにかける。

め「あつ、ロイからだわ。どうしたの？」

ろ「ああ、敵と遭遇しなかつたか？」

め「ええ、今は。何で？」

ろ「お彼らの近くに異様な魔力を感じる。」

め「ええ、気づいてるわ。だけど大丈夫よ。」

ろ「そうか、それならよかつた。気をつけろよ。」

でけえ魔力だなあ。メアリー、マサヤ、大丈夫か？ま、マスターのほうが危険だろうが。

つか、早く誰かと殺りあいてえんだけど・・・

18話 亂戦（2）

s i d e ガイ、 ユウト

2人は目を疑つた。なんせ、鬼のボスであろう黒鬼が、サウスタに向かつて拳を降ろしたからだ。その拳はサウスタよりも大きい。サウスタの身長なんて、黒鬼の膝にも及ばない。けれど他の鬼は動じもせず、ガイとユウトを襲うが、2人はかわしながら、黒鬼の様子を観察していた。拳を振り下ろす黒鬼は泣いていた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

黒鬼の拳がサウスタに近づいていく。そして、ブショウウと音を立ててサウスタの地が飛び散った。拳を上げると、サウスタは木つ端微塵になっていた。

サウスタ「「「やつてくれましたね。黒鬼さん。」」」

ガイ、 ユウト「……」

黒鬼は困惑している。確かにそうだろう。今潰したはずの人間の声が、重なつて聞こえてくるのだから。そして、鬼軍団の奥には、サウスタが6人。

サウスタ「ふふふ、やはりキミにはその程度の改造しきれませんでしたね。知性と感情をコントロールできるとは。鬼もなかなか興味深いものだ。」

黒鬼はフウーフウーと息を荒げ、サウスタたちを睨みつける。

サウスタ軍団が何やら唱え、1人のサウスタがユウトに向かつて飛び出した。ユウトは不意をつかれ、急接近を許してしまった。そしてサウスタの脛が、腹に直撃する。

ユウトはそのまま10メートル程吹っ飛んだ。

そこに、黄鬼の放つた極太の矢が3本飛んでくる。矢は阻止されることなくユウトの元までたどり着いた。

ガイ「ユウト……！」

ドカアアアアン

ユウトはシャドウウェポン・バリアを発動し、なんとかその攻撃をしのいだ。だが、矢先はバリアを貫き、ユウトの眼前で静止していた。

ユウト「ヒィー、あぶねえ。そろそろ本気で行くぜ。シャドウウェポン・アームズ・ゲート……！」

ユウトの背後に3メートルくらいの門が現れた。門が開くと、大量の矢が飛び出した。

鬼軍団は耐えられるはずもなく、大多数が全身に魔力の矢を浴び、死滅した。

サウスタ軍団は、ひよいひよいと右へ左へ飛んで避けまくっている。門が閉じたとき、残っていたのはユウト、ガイ、サウスタ6人、黒鬼、鬼8体だ。

サウスタ「ほれほれ、剣士さんやい。よそ見しないでね。」

ガイはサウスタに胸ぐらをつかまれ、サウスタ4人のほうへ思い切

り投げ飛ばされた。

ユウト「ガイさん……」

ユウトは鬼に阻まれてガイを助けることができない。

サウスタ「「「来ましたね。『テストラクション・サークル』」「
4人のサウスタの中央には魔方陣。ガイはそこに落下した。その途
端、魔方陣が光を放つた。

サウスタ「「「魔方陣よ、目標はこの男です。」「」」

魔方陣が呼応するように、点滅すると、光の柱が魔方陣から出現し、
ガイを包み込んだ。

ガイ「うああああああああああああ！」

ユウトは鬼を潜り抜けようとしたが、やはり抜けない。ガイさん・
・

すると、黒鬼が動いた。4人のサウスタに向かつて走り出した。サ
ウスタは3人は気づいたが、背後から走ってこられてきているサウ
スタは気づかない。そして黒鬼の足で、サウスタを踏み潰した。
魔方陣が不安定な形になり、光の柱は消滅した。ガイはところどこ
ろに切り傷ができていた。サウスタは一旦合流した。

ガイ「お前・・・今、もしかして・・・」

黒鬼はガイを睨みつける。お前も同じだと言つてるようだ。

ガイ「すまねえな。お前の子分をあんなにしちまつて、だけど今は共闘しかない。あの鬼たちも、もう・・・」

黒鬼は、サウスタ達を見て、ガイに視線を戻した。合意してくれたようだ。

ユウトは鬼たちと相手をしていて、あることに気がついた。そしてそれは極めて単純であつた。

耳に無線機がついている。

ユウト「シャドウウェポン・ランス」

ユウトは若干呆れつつも耳の無線機を破壊する。すると鬼は我に返る。そして周りのおびただしい数の鬼の死体を見て、呆然としている。

残りの4体の無線機も壊す。赤、赤、青、黄、黄は正気に戻る。

ユウトは内容を簡潔に話し、他の鬼を救えなくてすまないと謝る。鬼は全員泣いていた。

ユウト「倒すべきは、あそこのチビ科学者だ！」

鬼は立ち上がった。みんな涙を拭き、ユウトの後に続く。

黒鬼は、2人のサウスタを相手にしていた。さつきまでは不意打ちをしたから攻撃がヒットしたが、今回は掠りもしない。

サウスタ「「メディカル・ホーミングブلاست！」」

サウスタからカプセルが2発飛んできた。黒鬼は避けるが、追尾してくる。黒鬼はカプセルを掴んだ。そして、サウスタに投げつける。サウスタは手をかざした。すると、ミサイルはまた照準を合わせなおした。黒鬼は体制を崩されたままだ。黒鬼は死を覚悟した。

ドカアアアアアアアアアアアン！

黒鬼は目を開けた。すると赤鬼と青鬼がミサイルを殴り飛ばしていった。黒鬼は驚きを隠せない。

赤鬼と青鬼は涙を浮かべながら黒鬼のほうに振り向き、ニッとも笑つた。

黒鬼も泣きながら笑いかえした。

ガイも2体のサウスタと戦っていた。こちらも、ホーミングブلاستによつて苦戦していた。

ガイ「チイ、あのチビにも誘導できないし、さつきの爆発を見れば、威力はハンパじゃねえ。ウォーレルニア！出て来い！アクエリアス！」

剣から、水色の男が現れた。かなりごつく、テルマエ マエの表紙を想像して欲しい。

男は右手を前に出し、そのまま右に振り切つた。すると、大量の水が噴き出し、ミサイルを包み込んだ。すると、ミサイルのケツから噴き出していた炎が消え、そのまま落下した。

男は時間切れ、というようにガイを見つめたあと、光になつて剣に

戻った。

ありがとよ、アクエリアス。

ガイは剣を握りなおし、サウスタに斬りかかる、だが、サウスター2人はそれをかわし続ける。

そして、1人のサウスターが剣をかわして、ガイの腹に拳を叩き込んだ。ガイが怯んだところでもう1人のサウスターがガイの頭にかかとを落とす。ガイの頭は、そのまま床にめりこんだ。

2人のサウスターは、笑ながらジャンプし、腕を広げる。

「「ヴァイラスストーム」」

2人のサウスターが腕を上げる。赤色の竜巻が発生し、ガイを囲む。嵐がやんだあと、そこにガイは居らず、穴が開いていた。

サウスター「床を壊したか。」

サウスターの背後に剣が光る。そしてサウスターを真つ一つにした。残ったサウスターは驚き、あわてて飛び退く。

ガイ「下に逃げたと思ったか？ 残念、上に逃げました！」

サウスター「なるほど、下に逃げたと思わせて上に跳んだか。なかなか頭を使つたじやないか。馬鹿の分際で。」

ガイ「お前もここまでだな・・・！」

ガイは背中に焼きつくような衝撃を覚えた。後ろには笑ったサウスターが立っていた。

サウスター「私は5人、いや4人もいるのですよ？ 2対1なんて思わないでくださいね。」

ガイはその場に倒れた。

そこにユウトが駆けつけ、

ユウト「待っててください。こいつらは俺が殺りますから。」

そう言つと、ユウトはサウスタに接近し、1体を蹴り飛ばした。

「シャドウ・ハンマー！..！」

サウスタの頭上に黒いハンマーが現れ、ユウトはそのハンマーを遠隔操作で落とした。血が噴き出し、床が抜ける。

黒鬼は、鬼たちと協力してサウスタを倒している。

6対2、鬼のほうが圧倒的に有利だ。サウスタは防戦一方だった。だが、鬼軍団の攻撃に耐えられなくなり、1体のサウスタが2本の矢に同時に射抜かれた。

サウスタは残り2対。合流し、お互い手を合わせる。すると、むくむくと膨れ上がり、1匹の巨大な蜘蛛になった。足は6本、既に服はない。紫と黒の縞模様の蜘蛛は、鬼たちと同じ大きさだった。

蜘蛛が口を動かし、ひゅんと針を飛ばす。青鬼に命中した。すると、青鬼は悶え苦しみ、そのまま動かなくなつた。

場が凍つた。

ガイはふらふらと起き上がり、巨大な蜘蛛を見上げる。ウォーレルニアをしまい、例の伸びる剣を取り出した。

コウトも、自分の周りに魔方陣を4つ展開させた。

蜘蛛の4つある目が、ガイとコウトを捉えた。そして、毒針を飛ばしていく。

コウト「ガイさん、ここ俺が！シャドウェポン・メタルシールド！」

バリアより範囲は狭いが、硬そうな壁が現れる。

当然、針ごときが貫通するはずもなく、キン、とはじかれる。

赤鬼が蜘蛛に殴りかかる。狙いは足、だが、尻から体液が飛び出し、赤鬼にかかった。赤鬼は見る見るうちに溶け、残ったのはわずかな肉体と骨だけである。

黄鬼も矢を放つが、蜘蛛はそれをかわす。全く相手にされていない。

黒鬼は、何かを決断したかのように立ち上がった。

19話 亂戦(3)

黒鬼は立ち上がつた。

そこには黒鬼ではなく、鬼族のリーダーとしてのプライドの塊であった。

ガイ「黒鬼」

黒鬼は怒りによつて顔が真つ赤になり、水蒸気が出ている。2本の角は帶電し、パチパチと音を立ててゐる。

黒鬼が咆えた。鼓膜が勢いで脳の中に沈んでしまいそうだ。黒鬼は自我を失っている。白目になり、もはや何を見ているのか分からない。突つ込む気なら、フラグを立てるだけだ。他の鬼が宥めるが、黒鬼は腕で払いのける。やはり何も見えていない。

案の定、黒鬼は蜘蛛に突っ込んだ。

「サウスターおうどでかいだけじゃ勝てませんよ。はい、プレゼン

蜘蛛が針を飛ばした。黒鬼は頭を右に動かしてそれをいとも容易く避ける。

サウスタ「なんと。冷静を失つてもここまで戦えますか。本当に興

味深い。むしろJリーグの方が強いんじゃないですか?」「

黒鬼は蜘蛛の目をひとつ掘んで、握りつぶし、顔面に右の正拳を叩き込む。

サウスター「ギャアアアアア！」

黒鬼は休むことなく殴り続ける。4つあつた目も、すでに全滅だ。口からは針を発射しているが、黒鬼は蜘蛛の口を動かして猛毒の針を免れる。

ガイヤウや、鬼たちは見守るしかなかった。いや、見てるしかなかつた。

サウスタ「ちよ、グフツ、じは80.、レボンセー！」

□がありえない形をしているので、うまく発音できない。

黒鬼はさらに殴る。そもそも顔面がなくなるんじゃないか?というくらいこ殴る。

サウスタ「hがh go」 th s go...」――――――――――――

黒鬼には全く聞こえていないようだ。ガイやコウトにも理解不能だ
が。

まあ、仲間を25匹近く殺されて、冷静を保つてられるやつなんているはずがない。黒鬼も同じだ。仲間を大量に改造され、自分もさつきまで全く覚えていないのだから。黒鬼はサウスタをこれでもか、というくらい殴つた末に、正気に戻つたようだ。

「サウスタ」「・」ナニあうい・・・やつてくれましたね。」

「 「 「 ! ! ! 」 」

サウスターが正しく発音した！ ユウトは蜘蛛のほうを見ると、蜘蛛の顔面は完全ではないが再生していた。

ユウト「そんな、馬鹿な・・・めんどくせーーー！」

サウスター「面倒くさいとは、いい褒め言葉ですね。私のような雑魚はこうやって粘るのが精一杯なんですよ。しかし、あの毒針はですね、テイルジエニーの猛毒の体液を濃縮し、針の中に注入した最凶の毒針です。そして、この体液もそうです。この酸はタンパク質を1瞬で溶かします。故に、貴方たちはこれに触れれば、ジエンドということですね。」

ガイ「そんなことより、何で何人もいたんだよ。」

サウスター「何だ、そんなことですか。既に、私の本体は死んでいます。しかし、私はその本体です。矛盾してますね。ですが真実です。まず、私の体をたくさん作ります。つくるといつても、1体作るのには最低半年かかります。そして1体当たりに使われる人間の死体は5つ。また魔物の細胞なども必要です。」

ユウト「つまり、人が5人、犠牲に・・・なったのか・・・？」

サウスター「ええ、そのとおりです。私としてもとても心が痛みましたよ。同じギルドのメンバーをこんな風にしてしまって。」

心にもないことを。でも自分が不細工なのは自覚してるんだな。おそらく犠牲になつたのはイケメンだろう。

サウスター「そしてできたのが6つの体です。あとは複雑な作業になります。まず、神経を作り直すために、本体があらゆる動きをして、そのデータを体に書き込まなければなりません。それには3年かかりましたよ。ですがやはり限られた動きです。限界がありますが、この私の今の体、そうですね・・・スペイダーモードでいいです。モードと言つても戻れませんが。この体は、1つの進化した生命体と同じです。すなわち、どんな動きも可能！あの縛られた体とは違うのです。」

スペイダーモード・・・もつといいのはないのかとガイは考える。

サウスター「そのあとは知能です。私をサウスター・アリッジと同じ記憶、思考、目的を持たなければなりません。あの科学者、いや、私は本当に優秀です。なんせ私は彼だから。」

ガイ「ごめん。そろそろ本気で分からなくなってきた。」

サウスター「黙りなさい、サウスター・アリッジと同じ記憶、思考、目的を持たせるには脳をそつくりそのままコピーするしかありません。分かりますね？」

コウト「イケメンの脳か？」

サウスター「イケメンは余分ですが、正解です。2人分の脳を必要とします。よつて、私1人のための犠牲は7人、そして試作品が約70人。なんとも言えぬ優越感つてやつですね。」

狂っている。普通はそこで罪悪感を感じるのではないか？

サウスタ「そしてそのイケメンの脳・・・いや、普通の脳をフォーマットします。そして、自分のデータを書き込んだデータチップを脳に埋め込み、起動すれば私の脳が完成ですよ。あとはその脳と体の相性。あわなければ処分、合えば私たちのようになる。これで一応終わりですが、質問は？」

ガイは寝ている。「ウトは難しそうな顔をしている。

ユウト「そんなに多くの犠牲者が出る研究を、ijiのマスターは許可したのか？」

サウスタ「ええ、しましたよ。とても簡単に。お前は優秀な科学者だ。兵ないうらでもいる。使ってくれ、と。」

ユウト「ばかげてる・・・お前、ちょっと喋りすぎたぜ、また黒鬼に口瀆されんぞ？」

サウスタ「あの痛みも途中からは快感でしたねえ。」

ユウト「もういいや。ガイさん、行きますよー。」

ガイ「ん？終わった？ああ、終わったね。行きます行きます。」

ユウト「真面目にやりましょうよ。」

2人はサウスタに近づく。ガイは剣を構え、剣を伸ばす。

ガイ「グッ、重いな。質量も変化するのかよ。」

伸びた剣は蜘蛛の6本の足のうち、1本を貫いた、そしてその足は

黒焦げになつて灰になつた。そしてそこからは新しい足が一コキつと生えてきた。

ガイ「剣もじんねえし……」

ガイはこの剣の性能を把握してなかつたらしい。

ユウト「シャドウウェポン・デビルホーン！」

腕が変形し、一角竜の角のようになり、黒く染まる。その腕を口に突き刺す。ブシュウと体液が噴き出し、また再生する。

ユウト「キリがないな。1発でかいのを撃たないと。」

サウスタ「ヒューマン！」

サウスターの爪がユウトの腕を切り裂いた。

ユウト「じつて……」の野郎……シャドウ・ヒーリング！

影が腕にまとわりつき、出血部を覆い、固まる、ざつやら止血だけの応急処置のようだ。

ユウトはホーンを解除し、後ろに下がる。

ユウト「シャドウ・ブレス！」

指をおくサインにし、口の前に置く。息を思い切り吸い込み、吐き出す。ブウオオ！と黒いブレスが蜘蛛を襲う。ブレスが止み、蜘蛛が姿を現す。蜘蛛は腹から上がなくなり、体液をダラダラと流していた。

ユウト「くそ、足りなかつた……！」

ガイ「くそ、これしかない。ボルティージー！」

魔法陣が現れ、猿が登場。

猿「お呼びですかい？グリ……あれ？」

ガイ「俺の名前はガイだ。お前の力が必要だ。貸して欲しい。なんか大技をあの蜘蛛に！」

猿「お、おお……分かつた。アルティメットボルト・LVMAX
！！！」

猿が両腕を前に出し、極太レーザーが発射される。それは寸分の狂いなく蜘蛛に向かっていった。

レーザーが貫通し、蜘蛛の体は4分の1程になつた。

ガイ「くそっ！ウォーレルニア！」

剣を捨て、水剣を手に走り出す。

ガイ「アクエリアス・ショートオ！」

ガイは上空に飛び、剣を掲げ、魔力をためる。それを一気に振り下ろし、水の斬撃を繰り出す。

ユウト「シャドウウェポン・テラ・ボム！」

コウトは両手を掲げ、上に広げる。すると薄暗い弾が出現し、むくむくと膨れ上がる。コウトはそれをよいしょ、と投げる。皆はその様子を眺めている。

コウト「既遂ばー」の周辺の部屋は木つ端微塵だ

「

三つののが遅い

「ウチ、「皆早く逃げて~」

ガイ「チツ、」

ユウトの放つた巨大な薄暗い球体は蜘蛛へと落ちていく。黒鬼も仲間を呼んで逃げようとしている。

サウスタは体がほとんどなく、ぐつたりしている。

「ウト「下だ！」、下に逃げろ！」

ユウトは影攻撃で床に穴を開け、下の階へ降りる。

「ああ、なんとなく分かつてゐるぜ。任せな。」

ヴェステアーロンが現れ、ガイを乗せて降下する。ガイは先ほど開けた穴から逃走を図ったようだ。鬼たちは、ズシン、ズシンと音を立てながら着地する。ここ周辺の部屋は実験スペースなのか、とても広い。ここは、さつきサウスタと戦つたところよりも広い。

上の階で爆発が起きた。上の床は全て壊れ、下に降つてくる。

ユウト「馬鹿な、こんだけしか壊れないだと……？」

ユウトはこの周辺の部屋は吹っ飛ぶと言ったが、実際は1部屋しか壊れていなかつた。そして、その部屋も壁にはあまり壊れた痕がない。

砂埃が立ち、天井を見上げるとさつきの部屋の分天井が高くなつて。
・・・・・！

ユウトとガイは驚愕した。鬼たちもだ。天井には、蜘蛛の巣を作り、その中央で固まる蜘蛛が1匹。そう、サウスタだ。

サウスタ「はははは！…！こんなんで私を仕留めたと思いましたか！？甘いですね！」

そう言い、さらに上の階の壁にも糸を張り巡らす。なんだか黄ばんだ糸だが、サウスタの体重を支えるのだから、とても丈夫に違いない。つかまつてはいけない。

サウスタ「危なかつたですねえ。あんな攻撃をもうに喰らつたら即死ですよ。変身してなかつたら終わつてましたね。」

コウトは携帯電話でロイに電話する。

コウト「ロイさん、じつは結構時間がかかりますけど、どうですか？」

ロイ「問題ない。俺もマスターを探している途中だからな。さつきの爆発、テラボムだな？ それでも倒せないのか？」

コウト「ええ、まあ必ず始末します。では」

ロイ「ああ、死ぬなよ。」

コウトは携帯をしまう。

サウスタ「終わりましたか。では再開と行きましょうか。」

サウスタは毒針をガイとコウトに向けて乱射するが、コウトのシールドによつて阻まれる。ガイは剣を拾いに行こうとダッシュする。サウスタが阻止しようと酸をぶちまけた。だが、それもヴェステアーロンの攻撃によつて阻まれる。ガイは剣を拾い、サウスタを見据える。

サウスタは天井から飛び降りた。着地時に足が全部折れたが、すぐに再生する。そんな中、コウトは鬼を守るために、鬼のところにいた。サウスタは、慌てる様子もなく、ただ相手の動きを待つっていた。

黄鬼が矢を放つた。回転しながら蜘蛛に向かっていく。命中したが、矢がズブズブと蜘蛛の中に沈んでいく。サウスタが跳躍し、その黄鬼の後ろに着地する。コウトはしまった、と顔をこわばらせる。何

が発動させようと思つたが、遅かつた。すでに黄鬼の上半身がなかつた。そのまま赤鬼が顔面に右足で思い切り蹴りうとするが、ひよいとかわされ、爪でその足を切断され、そのまま右腕をも切断する。サウスタは楽しそうに笑う。赤鬼も、ほんとは即死させることができただろうが、しなかつた。殺生を楽しんでいるのだ。

「コウト」「シャドウウェポン・ソード！」

コウトの背中に剣が現れる。剣を発射し、目を潰す。サウスタが楽しそうに絶叫し、毒針を撒き散らす。ガイはヴェステアーロンの魔術によつて免れた。そして、鬼たちは、コウトの魔術により、危険を回避した。

サウスタは一時的に目が見えないだけで、すぐに回復する。もう二つの目が再生している。

猿「ボルトミサイル！」

少し忘れ氣味だったが、忘れんなどばかりにミサイルを発射する。サウスタは正確に爪で打ち落とす。しかし、爆風で周りが見えない。

ガイ「今だ！月下砲・王雷！」

ガイの剣がギュイイイイインと伸びる。それはサウスタの顔面を貫通する。そして、その周囲は黒く焦げ、無くなっている、穴が開いているのだ。

「コウト」「シャドウ・ハンマー・シャドウ・ブレス！」

コウトは2つの魔方陣を展開し、人よりも大きいハンマーを召喚し、

蜘蛛の頭部を潰す。大きな地響きがなる。それでも休まず。口の前に手を当てて、プレスを発射する。

ハンマーによる煙と、プレスによって、サウスタの周りは何も見えなくなつた。

煙が薄くなつていいく・・・

何もいな? 体液が飛び散つている。跡形もなく消したのだらう。

コウト「ガイさん、帰りますよ~」

ガイ「何言つてんだ! ! ! ! ! 伏せろ」

コウト「えつ、何?」

コウトは咄嗟に伏せる。コウトは一瞬間に何か通り過ぎたよつた感覚を覚えた。

そして、コウトの隣に何か落ちてきた。大きい、onzugiricoあるんじやないか?

ユウト「く、黒鬼・・・・？」

そう、床には黒鬼の頭が転がっていた。

21話 蜘蛛の生き様（2）

「ロゴン

コウトの横には黒鬼の頭。そして数秒後、ズシィイイン、と黒鬼の体も遅れて崩れ落ちる。

コウト「え・・・何で・・・」

サウスタ「んふふ、黒鬼さん、『苦勞様でした』。」

コウトの背後からサウスタの声が聞こえる。あの攻撃を回避したらしい。

本当に生命力の強い蜘蛛様だ。蜘蛛はケラケラと笑うように跳ねている。

コウトはそんなサウスタを血走った目で睨んでいる。

そうだ、俺がいけなかつたんだ。俺があそこで気を抜いていなければ黒鬼は、他の鬼の助かつたかもしれない。コウトは鬼たちのほうへ目を向け、鬼たちの亡骸を見つめる。本当にすまない。俺が調子乗つて、肝心なところでダメだったから。

さつき同じ志を持ったばかりの鬼たちなのに、そこまでの感情をもつてしまふほど、いい種族だった。

ユウト「蜘蛛がああー、殺す！シャドウ・フレアソード！」

ユウトの背後に薄い赤色の炎を帯びた剣が6本現れた。

サウスタ「火属性だと…？さつきの薄暗いのだけじゃないのか！」

ユウト「ああ、基本は影だ。それを少量の属性の魔力と練り合わせることで、属性を帶びた影となる！だが、魔力を混ぜるに当たつて影と影は混ざつても威力が変化するわけではないけどな。」

サウスタは後ずさりする。

ユウトは剣を一本ずつ発射した。1発、2発、と蜘蛛が巨体に似合わない素早い動きでかわし続けるが、5発目にして、後ろ足に剣が命中し、6発目はその足の太腿に突き刺さつた。サウスタは地面に落下し、足をバタつかせる。剣は沈むことなく炎を発し続け、蜘蛛の足を蝕んでいく。

サウスタは糸を剣に向けて発射する。糸は剣の柄に絡みつき、剣を引っこ抜く。

ユウト「シャドウ・ガイアダンス！四獸降臨」

サウスタ「今度は土か！」

ユウトの周辺の床が盛り上がる。そして、4本の柱になる。それぞれの柱の頭は龍、鳥、虎、亀になっている。それぞれ床の色の白色だが、迫力は十分だ。

ガイ「四獸降臨が出たか、いつみてもすげえな。」

青龍、白虎、朱雀、玄武は蜘蛛に襲い掛かる。顔を突っ込み、蜘蛛の体を貫き、縫うように暴れまわる。

「ウチの床が素材なら、おまえの酸や毒針は効かないよな。せいぜいもがいて苦しんで、己の犯した罪を悔いるんだな。」

青龍が目を喰いちぎり、朱雀が背中をついばむ。玄武は足を引っ張り、白虎は腹を食べている。サウスタは抵抗を試みるが柱が絡まって動けない。

匹獸が蜘蛛を食している最中にも蜘蛛は再生する。だが、それをも四獸たちは食い続ける。

容赦がない。

ちが受けた痛みや悲しみはこんなものじやない。

サウスタ「ああああああああああああー」

サウステンだ。口から毒針を大量発射した。その量は今までの比じゃない。1秒間に50発は発射しているだろう。

そして、

ガイ「くあつ！」

תְּנִינָה וְעַמְּדָה

ヴェステアーロン・ボルテイジ「ユウト！・ダンナア！」

2人が被弾した。みるみる力が抜けていき、膝から崩れ落ち、苦しそうに胸を抱える。

涎がダラダラとたれ、震えが止まらなくなる。だが、四獸は止まらない。

サウスター「どうだ……これ……で……貴方たちだつて……死にます……」

ガイ「クソ……冗談は顔だけにしろ……」

地味に貶している。

解毒剤、解毒剤はどこだ?とガイはあたりを見渡す。オレは1針だけだが、コウトは5本は当たっていた。俺が見つけなきや……。

サウスター「無駄です……解毒は……できません。」

くつそ、ここまでか。

ウォーレニア「……今まで、ありがとな。少々荒い使い方を何度もしたけど、それももうできない。アクエリアス、結局何も、話さなかつたな。話してみたかつたんだぜ?お前のそのゴシそうな声を聞いてみたかつた。畜生、俺があんな蜘蛛野郎に負けるなんて。口の中に地の味がする。内蔵もやるのか……こんなところで……」

ガイ「うう……ううああああ……」

手に持っている剣が光る。

ガイ「ううおおおおおおおおおああああ!」

剣が水色から濃い青色に変わる。

そして、体の氣だるさは全て吹き飛んだ。血の味はするが。

? 「ついにここまで来たな。ガイ・ランドルフ。私はアクエリアスだ、靈劍ウォーレルニアに住む精靈だ。」

アクエリアス「この剣はお前が強い意志を確認しなければ本来の力発揮できない。そして、今、それが確認された。この剣は靈劍ウォーレルニアではない。この剣の本来の名前は、靈劍ルシフェル」

ガイ「ルシフェル・・・そうだ! ユウトは! 治せるのか! ?」

アクエリアス「ああ、見ておけ。」

アクエリアスがユウトの元へ駆けつける。そして、片手に緑色、もう一方の手には青色のオーラを纏い、ユウトに強引に押し付ける。ユウトは一瞬ビクンと跳ね上がり、動かなくなつた。

アクエリアス「これで大丈夫だ、しかしこの毒は強力だ。内部損傷はあるが、外部損傷まである。彼は起きたとしても、すぐには動けんだろう。」

ガイ「ボルティジ、ヴェステアーロン! ユウトの近くにいろ! 絶対に守れ! !」

四獸は崩れかかってきているが、まだ動きを封じてくれている。今しかこいつに止めをさせない。

ガイ「アクエリ亞ス！一発で決める！」

アクエリ亞ス「ああ、確かにこいつは厄介だ。今しかないだろうな。

」

ガイは自信に満ちた表情で蜘蛛を見つめる。

ガイ「サウスター！お前はやりすぎたーあの世で泣いたってもう遅い！お前は死んでも永久に犯罪者のままだー！」

22話 蜘蛛の生き様（3）

ガイはルシフェルを握り締める。

靈剣ルシフェルは、ガイの所持していた靈剣ウォーレルニアが一種の封印を解かれて元の形に戻つたものである。

らしい余るほどだ。

である。

蜘蛛にはまだ四獸が纏わりついている。

六書口語卷第十四

ガイ「ブルー・オン・ブルー！」

剣をかざすと、水が集まり、細身の刀身が分厚い大剣に変わる。水はだんだんと固まつていき、氷とは違うが宝石のように硬そうな物質に変わる。透明な宝石の中に薄い刀身が輝く。美しきガイには似合わんそうだ。

大量の水を凝縮させているので見た目よりもずっと重い。

ガイが大剣を振り上げる。

ガイ「ファイナルアクエリ亞ス！！！」

ガイはその大剣を蜘蛛の顔面にぶち込もうとする。

そんな中、サウスタは

私は死んでしまうのですね。

幼いころから親には暴力を受けていた。そして、散々私を痛めつけたあと、蒸発してしまった。

そして私は、その憎き両親のあとを追うことはできず、公園で空を見つめていた。そして、ある一家に拾われた。そこの人たちは、私に優しかった。昔受けた虐待など、忘れててしまうほど。

そして私は魔法学校に入学した。当然のように私は誰からも相手にされなかつた。それは、この姿と両親がいないせいだ。

筆箱や教科書を隠されるのは日常茶飯事だつた。しかも、次の授業の教科に使う教科書を隠すのだから質が悪い。

椅子の上に画鋲が2・3個あつて、それを踏んづけて泣いた日もあつた。だが、先生は何も言わなかつた。机の上には菊の花が置いてあつたり、死ね！ チビ！ 糞野郎！ などの暴言が油性ペンで大きく書かれていたことがあつた。

もちろん家では何も言わなかつた。自分を救つてくれた恩人に心配をかけたくないのは当然だろう。そして、ここが唯一の心のより所だつた。

帰る場所があるから、トイレで用を足していたときに水を被せられたつて、テストでしてもいいカンニングのせいで先生に怒られたつて我慢できた。

私は、これは自分のためだと言い聞かせて魔法や学問に打ち込んだ。

しかし、ある日学校から帰つてきたときのことだつた。

私は部屋の中から話し声が聞こえたので、耳を立てて聞いてみた。義父の仕事のことだろうか、義姉の進路のことか、それとも自分の将来か。

どれにも当たはまらなかつた。

母「サウスタ、今更だけどそろそろ邪魔になつてきたわね。拾つたばかりのこはは小さくて可愛かつたけど、今じゃあんなになつて・・・」

父「俺らの血が通つていなからな、適当な理由をつけて追い出すか？」

母「うーん、あの子には悪いけど、施設に入つてもらおうか。」

私は耳を疑つた。あんなに可愛がつてくれたのに、それはうわべだけだったというのか。

これは一応自分の将来に入るのか？そんなことはどうでもいい。

サウスタはドアを蹴破つて中に入った。父母は驚きを露せない。サウスタの手には包丁が握られていた。

サウスタ「何で・・・そんな・・・うわああああああああああああ！」

サウスタは無我夢中で父母を切りつけた。もう死んでいるのに更に傷つける。もはやどつちはが母でどつちが父か全く判別できないほどになつた。そして、ようやく我に返る。

何だ、この汚らわしい肉体は。私がやつたのか？そつか、だが私は悪くない。悪いのはこの男と女だ。

ただいまーーお父さんお母さん、いるーー？

ああ、姉さんか。あいつもだ、何を考えているか分からない。そして、いいことを思いついた。

サウスター「姉さんっ！…帰ったの！？今すぐ来て！父さんが、母さんが！…」

姉「何があつたの～？ キヤツ～！…」

姉は見てしまつた。両親の無惨な残骸を。

姉「嘘よ・・・誰が・・・もしかしてサウスター・・・あなたが・・・？」

サウスター「姉さんもそつやつて僕を疑うのか・・・」

姉「何言つて・・・うグー！」

姉の腹部には包丁が刺さつていた。そして、包丁が引き抜かれ血があふれ出す。

もはや、学校じりに世界に絶望していた。こんな世界じゃダメだ。僕の居場所は・・・

そんなことを考えて返り血を浴びて血だらけになつた服で近所の公園を歩く。街中の視線など気にならない。（この世界には警察と呼ばれるものではなく、国ではなく、その地域の民が經營する対犯罪組

織がある。）

そんなとき、僕はあの人に出会った。

アシュリーと名乗る女性は、ジニアットという不正ギルドのマスターだという。

「あなた、いい日してるわ。来るわよね。」

即答した。行くと。そここそが私の居場所だと感じたのだ。
勘は的中した。誰も信じあわない、弱いものは切り捨てられる、そ
んな理想の世界がそこにはあった。

そこで、私は科学者を務めた。私は自分でも分かる、天才だ。私に
できることはない。その気になれば、この城を飛ばすことだって
可能だ。

そして、私に課せられた課題。それは、神をも超越する力。当時の
私には何でもできると信じていた。

そして、私は研究を重ね、今の体を手に入れた。当然、神なんか超
えれるわけがない。

いつか、越えようと思つてたのに、超えてマスターに笑つて欲しか
つた。絶望の中で見つけた居場所だから。光だから。

目の前に蒼い剣が降つてくる。

マスター、あなたの役に立てたでしょうか。

サウスタ「マスター、私は・・・」

グシャ・・・ドパアアアアアン！

剣は床にめり込んでいる。剣が顔面を潰す。その瞬間、その剣から大津波が発生する。粘り気が強い水だ。その水に触れた蜘蛛は弾けとび、跡形もなく消えた。

ガイ「ハア・・・ハア・・・ユウト、終わったぞ！」

23話 メアリーの翻つぶし（1）

s.i.d.eメアリー・マサヤ

ロイがここに強い魔力を感じるつてつけど、ないわねえ。暇だわ～
皆今頃楽しくやつてるんだらうつな。

メアリーさん、まるでピクニックに来てるみたいだ。ここは戦場だよな？アレ？

メアリー「あれ？行き止まり？」

メアリーの前には壁がある。天井は高い、ここで終わってるはずないんだが。

真っ白な壁がメアリーたちに立ち入り禁止といつよつとそびえる。メアリーは邪魔なんだよ！と壁を殴りつとした。しかし、白い壁に拳が当たることはなかった。
すり抜けたのだ。

メアリー「ホログラムか、脅かしやがって。」

マサヤは完全に縮こまっている。

? 「え？ 誰か入ってきたーーああーービリッシュ・・・

メアリー 「私はメアリー、」のナはマサヤ。あなたは向でいつの？・

か、可愛い！

名前教えちゃおうかな。

「ほ、僕の名前はボルジアント・フェアーレ。だ、第1部隊隊・・・長。隊長つていつも第1部隊は僕だけだけど。」

何、この子。ガリガリじゃない。ちゃんとご飯食べてるのかしら。こんなに色白で・・・。しかも第1部隊？ てことはこの子が強い魔力の持ち主？ でもそんな雰囲気は微塵も感じないわ。

メアリー 「? なんで一人なの？」

「僕は、その・・・こんな性格だから・・・。」

メアリー 「そうねえ、このギルドはいくつ部隊があるの？」

メアリーは胸を強調しながら言った。

「あつーあの・・・でも・・・・・・・・6つあります。」

メアリー 「いい子ね。あと、キミは強いの？」

「え、えと・・・一応第1部隊隊長ですから・・・まあ。」

メアリー 「ならいいわ、じゃあちよつと待つててね。」

メアリーは携帯電話を取り出し、マサヤを除く全員に部隊の数をメールで送信した。

「じゃあ、始めましょ」

メアリーは櫻をボルジアントの頭に突き出す。

ボルジアントは突然のこととに驚きながらも頭を傾けてかわす。

マサヤは外から見守っている。

メアリーはそのまま槍で頭を薙ごうとする。しかし、ボルジアントは後ろに飛びのいて距離をとる。全く構えず、寒そうにポケットに手を入れている。ちよつと待つてよ、まだ準備中だよ・・・といふ表情だった。

メアリーはお構いなしに突きを連続で繰り出す。高速で上下左右に変幻自在に槍を突き出しが、全部紙一重でかわされる。そして、最後に繰り出した切り上げは頬をかすめ、ボルジアントの頬に血が流れる。

ボルジアントの魔力が膨れ上がる。

メアリーはその上がりように驚いた。
飛躍的上昇だ。

「誰だあ？ブロンド、お前か？」

メアリー「ええ、そりや」

笑顔で答える。

「許さない・・・許さない・・・許さない・・・」

メアリー「かかつてきなさいよ。」

この言葉にボルジアントが反応する。

「いいの? いくよ?」

だから早く来いっての、とメアリーは挑発する。

ボルジアントは、一瞬でメアリーの背後に移動した。そして、首に手刀を打とうとする。

メアリーは、ギリギリでしゃがんで避ける。集中してなかつたから全然わかんなかつたわ。危ない危ない。

そして今度は手刀をそのままたてに振り下ろし、脳天をかち割らうとする。

メアリーは槍を頭上に掲げ受け止める。ものすごい衝撃だ。当たつたらどうなることやら。

ボルジアントの目は瞬きを全くせず、常に見開いている。ハッキリといって怖い。

メアリーは起き上がり、槍でボルジアントを薙ぐ。ボルジアントはしゃがんで避け、アッパー・パンチを繰り出す。メアリーは体を反らして避け、つま先でボルジアントの額を砕こうとする。ボルジアントは手刀ではじく。

メアリーは回し蹴りを繰り出す。ボルジアントの目が一瞬メアリー

の股にいった。それにより、ボルジアントは避けきれず、頭部に攻撃がヒットし、吹っ飛ぶ。

メアリー「全く、まだまだ子供ね

ボルジアントは痛いけどそれ以上の収穫を手に入れたような顔をしていた。頭の中で映像を繰り返しているようだ。ためしに近くに落ちていた瓦礫を投げてみた。普通に当たった。しかも金的に。ボルジアントは痛そうにぴょんぴょんと跳ねる。

メアリーは首を傾げる。メアリーにはこの痛みは分からぬ。

しばらくすると倒れこみ、『うううう』し始めた。そんなに痛いのだろうか、とメアリーは考える。
うう・・・と、呻いている。

あ、やっと起きた。

ボルジアントは、この世の終わりのような顔でフウーフウーと息を切らしている。

目は血走っている。

ボルジアントは若干動きが鈍いが、動き出した。

走りながら飛び、膝をメアリーの顔面に叩きつけようとする。

メアリーは足を掴み、回転しながら顔を地面に叩きつける。「ゴスッ」と鈍い音が響いた。

マサヤは手で顔を隠している。

ボルジアントは鼻血を見てさりて発狂する。

さりて魔力が膨れ上がる。

24話 メアリーの躍つぶし（2）

ボルジアントの魔力が膨れ上がる——

確かに、これは危険だ。

常人がボルジアントの近くにいるだけでビリビリになくなってしまう魔力なのだから。

ボルジアント「僕を怒らせたね……。せっかく優しく接し合おうと思ったのに、もうダメだあ！」

メアリー「へえ、楽しそうね。私はそっちの方が嬉しいわ。」

ボルジアントが動き出した。一瞬でメアリーの懷に潜り込み、メアリーの腹に手のひらを叩き込む。メアリーはその速さに動けず、もろに喰らひてしまい、後方に吹っ飛んだ。

ボルジアントは止まることなく、追い討ちをかけよつとする。メアリーの顔面に膝蹴りを決めよつとする。

メアリー「うそつ、速つ……つづ！あつぶね！」

メアリーは咄嗟に起き上がり、槍で膝を受け止める。そして石突きで払いのける。

ボルジアントには全く構えていないが、隙という隙が見当たらぬ。

ボルジアントはメアリーに殴りかかる、メアリーも苦い顔をしながら避け続ける。

時折揺れる胸をマサヤは見ようとする。やはりマサヤも健全なる男

子高校生だ、気になつて当然だろ。

マサヤ「動きづらナーダな・・・」

ボルジアント「えへ、お前可愛いから俺の玩具にする」

メアリー「どういふことー?」

ボルジアント「うわー！ ハートポイズン！」

ボルジアントの皿の前に紫色のハートが現れた。ボルジアントが合図を出すと、それは高速でメアリーに飛んでいった。そして、命中するとそのままメアリーの中に沈んでいった。

メアリー「ちよー何コレー！」

特に変わった様子はなさそうだ。

マサヤも一安心した。

ボルジアントは微かに笑みを浮かべた。

ボルジアント「これで俺の勝ちだね。メアリー！」

メアリー「はあー？ 気持ち悪い。気安く名前で呼ばないでくれる・

・ん？」

メアリーは違和感を感じながらもボルジアントに攻撃を繰り出そう

とする。

ボルジアントはノーガードである。

舐めやがって、とメアリーは渾身の突きをボルジアントの心臓めがけて突き出す。

なおもボルジアントはノーガードだ。

メアリー「はあ！！

え、何で？」

メアリーの攻撃はヒットしたはずだった。

しかし、槍の先がボルジアントの胸の寸前でピタリと止まっている。

メアリー「何！？ビリヤッて止めたの？？」

ボルジアント「いや？メアリーが勝手に止めただけだよ？」

メアリー「そんなはずは・・・クソ！何で出来ない！」

マサヤ「師匠・・・さつきのハートですよ！それになんか仕掛けがあるはずです！」

ボルジアント「い詫答へ。この人は僕のものだ。さつきのハートは、俺、いや僕が独自に生み出した魔術でああ。この術を喰らった人は、僕が倒れるまで僕のことを思い続けるのさ。無意識のうちにね。悪くないだろう？メアリー、思いの人に倒されるんだから。いや、このまま奴隸でもいいが。」

メアリー「気持ち悪い――い・・・？」

ボルジアント「ほらほら、何か違和感感じてるでしょ？そのつひ僕のことしか考えられなくなるよ。」

25話 メアリーの脳つぶし？（3）

マサヤ（もしかして、これ、師匠じゃ勝てない？）

メアリー「アンタみたいな不細工、だれもときめかないわよ。」

ボルジアント「知っているさ、だからこの魔術を作ったんだ。皆もメアリーみたいに僕を不細工と言った。事実だけど許せなかつた。僕は外見で判断する人が大嫌いなんだ。この魔術を作ったときは興奮したよ。だって、女が僕のことを見始めるようになつたんだもん。」

メアリー「なんともエロい魔術ね。」

マサヤ（俺にも教えてくれ！……）

ボルジアント「だけど、この魔術にかかつたものは途中で耐え切れなくなつて壊れてしまった。体じやなく、心がね。」

メアリー「やつぱり嫌だったのよ。そんなくだらない魔術作つてる暇があるなら整形でもしたら？」

ボルジアント「そんなことを言つて、もう僕に対しても違和感を感じているくせに。強がらなくていいんだよ、メアリー。ここまでは耐えたのはキミぐらいかな。」

ちなみに、マスターのアシュリーさんには全く効かなかつたよ。」

確かに、もう私の心は持たないかもしない。

脳の思考の40%はこのダメ男になつてしまつた。

ボルジアント「行くよ、メアリー。ほら！避けてみろ！」

ボルジアントの腹を狙つた右の蹴り。メアリーなら普通にバックステップで避けることができたはず・・・だが、メアリーはその攻撃を避けることなく、もろに喰らつた。

この感覚は、肋骨が2本ぐらい折つただろうか。でも不思議と嫌悪を感じない。

ああ、術に落ちたのね・・・。

ボルジアントは更に骨ばつた拳で襲い掛かつてくる。メアリーは自分の意思なのか避けずに受け続けている。

マサヤ「師匠！ダメです！避けて！！」

はっ！そうだ、なにこんな攻撃受けているの？

メアリーはマサヤの掛け声によつて目を覚まし、距離をとる。すばらしく危ないかつ口ひ魔術だ。

これはもしかすると・・・

ボルジアント「そここの男、邪魔だね。僕とメアリーの二人の時間を・・・」

ボルジアントの目線がマサヤに向く。
メアリーもその視線を目で追う。

ボルジアント「ふふつ、掛かつたね。メアリー、本当の狙いはメアリー、キミさ。ハートポイズン！」

ボルジアントの目の前にまたしても紫のハートが現れる。

本当に気持ち悪い。

ボルジアント「発射！」

メアリーは既に踏み込んでいて避けることができない。するりとメアリーの胸に溶け込んでいく。

メアリー「う・・・ああ・・・」

メアリーの頭の中にボルジアントの記憶が入り込む。

幼いころの記憶。

家族は父親との2人暮らし。

しかし父は居て居ないようなもの。

いつも女を作つては夜に遊びにいく。まだ幼かつたころのボルジアントはこのことを父はお仕事が忙しいんだ。と思っていた。ボルジアントはある日、父の預金通帳を見てしまった。

45000

さすがのボルジアントも驚いた。

この預金額の低さに。

そして、ボルジアントは尾行を試みた。

そして見たのは父一人と女三人が一緒に歩いている。

父は女たちと宝石店に入る。

どれもこれも高そうだ。しかしボルジアントは宝石などには興味はない。純粹に父親が何をしているかだ。

父は、店員を呼び出し、ショーケースを指差す。1つではない、4つはある。

女たちは跳ねて喜んでいる。

ボルジアント「お父さん……やめてよー。」

あると父が寄つて来て小声で、

父「げ、ボルジアント……お前向で」に腰るんだー。」

と言つた。

ボルジアント「こんな高そうなもの……僕はお父さんは仕事して
るのかと……」の嘘つきー。」

女1「なに〜」のナ

女2「もしかして息子?。」

女3「ぶつせいい〜」

父「違うー。んな子俺は知らんー。」

ボルジアントは確かに聞こえた。心がガシャンと割れる音が。
呆然としていたボルジアントに父がのしかかってきた。

ボルジアント「え? わよ、お父さん重いよー。あれ? お父さん?」

死んだ。父は死んだ。だがどうでもよかつた。誰だ?

アシュリー「酷いわね〜、息子に誰だなんていう男は、生きている

価値がないわ。そこの女たちも、女と呼べるにはほど遠い種族ね。
死になさい。」

女たちはバタバタと倒れ伏した。
ボルジアントにとっては強すぎるくらいの刺激は、逆にボルジアン
トを覚醒させてしまった。

アシュリー「来なさい？貴方の好きなようにさせてあげるわ。」

そこからは、覚えていない。

だが、魔術を作ったときは覚えている。
無我夢中で、完成したときは嬉しくて死にそうだった。
早速、女兵士に試した。
見事、女を人形にすることができた。
男にも試したが、全く変化がなかつた。
まあ、あつたら嫌だが。

そして、もしやと思い、アシュリーの元へ向かつ。
そして、試す。

右手ではじかれた。

正直落胆した。せつかくマスターを口の人形にすることはできたか
もしれないのに。

マサヤ「師匠！師匠！…！」

マリー「…………」

マリー

・・・・・・・・・・・・・・

誰だよじやますんな

マリー「…………」

「！」

さつさと蹴りをつけて・・・ってアレ？動けない！？

何コレ・・・鎖？

くつや、ピンピンに張つてやがる。

マリーの四肢には赤色の鎖がつながっている。
壁から伸びている鎖はマリーを離さない。

ボルジアント「えへへ、マリーの思いを確かめるためにこの魔術
を使ってみたんだ。自我を失っていたマリーは簡単に掛かってくれたよ。まあ、2発喰らって、今正氣でいることはミラクルってやつ？ちなみに、その鎖は僕のことを思つほど強く縛るんだよ。そのうち、上半身と下半身が千切れるかもね。」

メアリー・マサヤ「……」

この間にも鎖はどんどん張つていく。

ボルジアント「あつはつはーこれからどうやって遊ぼうかなー、ねえメアリー」

メアリーは力なく頷いた。

マサヤの周りに、ドツと重い魔力が吹き荒れる。マサヤの腕、脚は光り輝き、いくつもの魔法陣が現れている。マサヤはこんなのは初体験だが、使い方は分かる。

この10個の魔方陣は、俺のためにある。腕に3つずつ、脚に2つずつ。

魔力に底を感じない。火事場つてやつか。

これは、

祖なる魔術

”ギギニング・テン・スペルズ”

ボルジアントも目を見開いて驚いている。

メアリーは俯いたまま、時折呻き声をもらす。

マサヤ「待つててください師匠！今助けますー！」

メアリーの返事はない

26話 マナヤ覺醒（前書き）

今回、次回は属性「じゅつき」、「じゅつか」です

ビギニング・テン・スペルズ

魔術、それは古代25人の手によつて創造された。魔方陣に魔力を流し込むという単純な発動方法だつたが、当時の人間たちは魔方陣から作成しなければならない。

そして、その25人は、何代もの時間をかけて、祖なる魔術、ビギニングを創造した。

威力は強力すぎた。副作用もハンパではない。

そして、1人の男はあまりの強力さに耐えられず、自我を失つてしまい。多くの人間を殺した。

その中には、ビギニング作成者も居る。

故に、この魔術は禁術とされ、封印されてきた。

だが、自らその魔術を呼び起こした者は2人居る。

それは、現在覚醒したイワモト・マサヤ

そして・・・もう一人

ロイ・ベルデム

この男は、呼び起こすとともに、改良を重ねた。

改良も決して簡単ではなかつたことを理解していただこう。改良の結果、得たもの、それは

副作用の軽減

威力の向上（小）

詳細は後ほど

sideマサヤ

力が体中にみなぎる・・・

これなら、あの男だつて。

マサヤ「右足に宿りしは、重力をも超越する風！エンシェント・ソニック！」

ボルジアント「か、風だとおー！」

マサヤが一瞬にして消え、ボルジアントの背後へ。そして、右足で頭を蹴る。ボルジアントはきりり反応し、腰を低くしかわす。そして、ボルジアントは腹に蹴りをお見舞いする。マサヤは避けられず。当たつてしまふ。腹の部分は金属化していない、いや、できない。彼は今、腕と脚に金属化を集中しているため、腹にまで延ばしたと

する。すると、この魔術は一瞬で消えるだろう。

マサヤは空中で受身を取る。そのまま空を蹴り、ボルジアントの顔面を殴る。ボルジアントはまたもギリギリで避け、カウンターを決める。

ボルジアント「は、ははー見かけだけか！舐めないで欲しい、僕、いや俺だつて第1部隊隊長だ！お前なんかに負けてたまるか！なあメアリー！」

メアリーの様子がおかしい。

一刻も早く倒さねば。

マサヤ「左腕に宿りしは、地球をも操る力！ガイア・フォース！」

マサヤの左腕に土属性が纏わりつく。

ボルジアントに向けて再び走り出す。ボルジアントの正拳にあわせて、左手を振り上げる。すると、床が盛り上がり、正拳を受け止める。

そして、床の壁が崩れた先には・・・誰も居ない。

背後か！

遅かった。ボルジアントは右の蹴りをくらい、背中を突き出した恰好で吹っ飛んだ。壁に激突し、パアアアアンと壁が少し壊れる。

ボルジアントは痛てて・・・と起き上がる。

ボルジアントは血を吐いている。

ボルジアント「クソクソ！もう許さんー火と水、今ここに交わり、消えることなく永久に燃え続ける炎となれ！蒼炎龍！」

ボルジアントは背後に巨大な蒼い炎の龍を召喚した。目だけは紅い。

メアリー「召喚・・・」の地に降臨し、邪念の血を啜り渴べせ！あとは任せたわ、ルージュ！」

ボルジアント・マサヤ「へ？」

メアリーの目の前に細身で170cmくらいの魔女が現れた。爪は長く、全身黒い化粧ばかりだ。

ルージュ「メアリー？何よその無様な格好。」

メアリー「なんのなんの、演技よ。演技。」

メアリーの鎖が緩々になっていく。そして、メアリーの脚が地に着く。

メアリー「でも動けないから、せめてそここの炎の龍を潰して あはは」

ルージュ「そんだけ？手こなさそつな相手ねえ。だったらそこのピカピカの少年のほうがいいわよ。おいしそうだもの。」

マサヤ「メアリーさん、最初からお願ひしますよ～」

メアリー「いやいや、最初から私はあなたの覚醒を狙ってたのよ。ビギニングが使えるのこれでマサヤとロイよ。しかも風だなんて、古の属性じゃない。つかルージュ！動け早くな！」

ルージュは3倍はあるだろう大きさの龍の頭に向かって跳躍する。龍が炎の弾を発射する。ルージュは受け止め、跳ね返す。しかし、やはり炎、吸収してしまつ。

ルージュ「なんだ、やっぱり自分の炎じゃ巨大化しないか……」「

ルージュはつまらなそうに右手を前に出し、手を広げる。

ブラッド・イクスピロージョン

ルージュがそう呟くと、手から極太の紅いレーザーが現れ、蒼炎龍を貫く。

胴体にでつかい穴を開けられた龍は倒れ、周りの炎はだんだん消えていった。

ボルジアント「そんな・・・僕の守護神が・・・僕だけの・・・」

ルージュ「あ、貴方が作ったの？道理で弱いわけだ。いい？私たちには年齢で強さがほとんど決まるのよ。もちろん例外もあるわ。ちなみに私は734歳。でも300歳で私より強いのも一人だけ居るけどね。」

メアリー「手綱づけるの大変だったんだから。もう

ルージュ「あなたの熱意に負けたのよ。でも、デートと被つている日は来ないからヨロシク。じゃあね～」

ルージュは消えていた。

メアリーは手を振っている。

ボルジアント「どうこうことだ・・・メアリー、キミは・・・」

メアリー「効くかあんなショボイ術。マサヤが楽しみで掛かつた振りしてたの。記憶流れ込んできただけどね。同情するわ〜。それ・だ・け」

「マサヤ、こりませんよ。こうのへやの痛かったんですよ？」

メアリー「私のほうが痛いわ！何発喰らつたと思つて・・・」

ボルジアント「五月蠅い！――！」

メアリー「マサヤ、今の貴方なら勝てるわ。」

マサヤ「はあ、何か適當ですね・・・」

マサヤ「グラビティ・ゼロ」

再び風属性の魔法を発動し、神速でボルジアントに襲い掛かる。

左手を振り上げ、床を操作し、ボルジアントの動きを封じる。
そして金属化している右腕で、思い切り顔を殴り飛ばそうとする。

マサヤ「右手に宿りしは、地獄より現世に迷い込んだ業火！ヘル・
ブレイズ！」

右手に黒色の炎を纏つた右手はボルジアントの頬をとらえ、抉り取
つた。

その顔は見るも無惨になり、顔の三分の二を失っている。

マサヤ「ヘル・ブレイズ」

ボルジアントの周りに黒炎が回り込み、一気に飛び込む。一瞬にして灰になつた。

簡易火葬だ。

これでボルジアントは成仏できる・・・・んじゃない？。

メアリー「ふんっ！」

メアリーが鎖を引きちぎる。マサヤは呆然としていた。
おいおい、体見せてみろや。筋肉だらけだろ。

メアリーは携帯を取り出す。

メアリー「ロイ？終わったわ。で、分かつたことなんだけど、マスターの名はアシュリー、女性。相当強いわ。」

ロイ「大丈夫だ、俺を誰だと思っている。」

メアリー「そうね。あと、マサヤがビギニングに覚醒したわ。」

ロイ「ほつほお、早いな。使えていたか？」

メアリー「ええ、もうじき倒れるはずよ。」

ロイ「まあ最初はそうだな。分かった、じゃあ先に入り口に戻つて
おけ。ガイとコウトが居るはずだ。」

メアリー「了解、気をつけてね。」

27話 お嬢様による一方的な攻撃つてどーよ（1）

間が空いたため、一応キャラを確認

ライラ・パルキオプス

（フィアラル）

リップ、シュバリエ

（ハーピィ）

の3名で行動している。

ライラ「なかなか敵が現れませんね・・・」

リップ「班の数は確かに6つですよね。そのうち、メアリーさんが連絡してきたってことは、5つのうちどれかですね。或いは1班以上。

「

ライラ「早く来ませんかねえ」

シユバリエ「・・・プロッサム様と似て貴方もなかなかの戦闘狂ですね。」

ライラ「ええ、私がだから。」

そんなことを話していると、シユバリエがいきなり背筋を伸ばし、周囲を警戒しました。

ビリヤークシユバリエは周囲の気配を把握できるようだ。正確に。シユバリエ「いますね・・・A級が2人・・・まだ気づかれてません。」

ライラ「Aって強いの?」

シユバリエ「プロッサム様はうです。でも私たちじゃ勝てっこないです。」

ライラ「だから私が居ますよ。あなたたちは指一本触らせませんで安心してくださいね。」

シユバリエ「あの角を右に曲がって、左に曲がつたところのドアの奥です。かなり広いですね。」

ライラ「ええ、覚きました。」

最初のうち半白で統一されていた壁の色も、角を曲がった瞬間、黒

も目立つよくなつた。紫も混じり、不思議な雰囲気を醸し出している。

ライラはドアを慎重に開ける。

? 「え？ 来たつて？」

? 「ほら、あそこー！」

? 「ほんとだ！ しかも全員女・・・」

二人の醜く太つた男が2人。奥のショーケースにはお菓子がたくさん飾つてある。
探せばなんでもありそうだ。

「つと、自己紹介からネ。オデの名前はミルケリーム」

「オイラはシユルクレイム。よろしくだヨ」

ライラ

「地より出でよ。翼を失い、正義に見放された墮天使。悲愴と憎悪の矢を放て！ ケルビム！」

狡猾すぎる故、精霊界から追放されし魔術師。黒きナミダを力に換え、真の主の武器となれ！ ハウリロプラス！

悪を碎き、善を全てとする光の精霊。悪しき者に慈悲なき制裁の光を！ ヴィーナス！

主を守護するためだけに産まれた、悲しき黄金の盾。今こそ、産まれた意味を覆し黄金の矛となれ！ パーフェクト・ガーディアン！！

2人の話を完全に無視したライラ。
そして、4体の精霊を召喚する。

ケルビムと呼ばれた精霊は天使だが、全身が黒く、翼が赤い鎖で縛られている。手には黒く輝く弓。矢にはとてつもない魔力が込められている。目は怒りに満ちあふれ、主といえど選択を間違えれば反逆もありえるだろう。

ハウリロプスと呼ばれた精霊は魔術師のような形状をしており。シリクハットを目深に被っている。手には真っ白の手袋。まるで手品師のような格好だ。口元はわずかに釣り上がりついてとても不思議だ。もしかしたら1番危険かもしねり。

ヴィーナスと呼ばれた精霊は、超いい人そうな女の天使だ。頭上には天使の輪。時折翼を動かしている。目は閉じていて、口元は優しい笑みを浮かべている。

パーフェクト・ガーディアン。恐らく最強だろう。金色のブロックを積んだようなその巨体に、同じくらいの高さの盾。大砲やガトリングが搭載されていて、もはや城だ。この精霊は15メートルくらいだが、他は3~5メートルだ。この黄金のボディには傷ひとつかなそうだが、あまりに大きいので下を潜られたりしないだろうか。

リップとショバリエは口をパクパクさせている。

ライラ「魔力供給お願いしますね。まだ余裕ですけど。」

28話 お嬢様による一方的な攻撃つてどーよ（2）

リップ・シュバリエ「ヒーリング！」

ライラが緑色のオーラに包まれていく。ライラは気持ちよさそうな顔をしている。

ケルビム「久しいな、ライラ」

ハウリロプス「珍しく護衛も居るぜえ？」

ヴィーナス「あの醜い2人組みが相手ね。」

パーフェクト・ガーディアン「・・・」

ライラ「なるべく早く終わらせようね」

ミルケリーム「無視すんなネ！」

シユルクレイム「いくヨー！」

2人はお菓子を投げ捨てて戦闘態勢に入った。

ミルケリーム「お菓子の邪魔をして～」

シュルクレイム「ただで済むと思つなよ～」

ライラ「まだ手は出さなくていいわ。」

ケルビム「いや、早く終わらせるところたのはオヌシだぞ?」

ライラ「ま～だ!」

ハウリロプス「いいじやねえか、ケルビム。ちょっとくらこ待つて。ライラは敵の攻撃を見てみたいってよ。」

ケルビム「・・・ああ」

ミルケリーム「つか、なんだネあの馬鹿でかいゴーレムは・・・」

シュルクレイム「いくしかないヨ! 脂肪弾!」

シュルクレイムの両手に脂肪と思われるものが浮かび、凝固する。ライラに向けて投げつける。

しかし、パーカー・ガーディアンによつて阻まれる。傷ひとつつかない。

まだまだ!とシュルクレイムは次々と発射する。

ミルケリーム「俺もいくネ! ミートボールボム!」

ミルケリームの両手にボーリング玉^{ハラコ}のホールボールが現れる。
食べれそうだ。

卷之六

ミルケリームの投げたミートボールは着弾地点で爆発した。結構な威力だ。直撃すれば人一人は確実に死亡するだろう。

ミルケリーム・シュルクレイム「うりやりやりやりやりや！」

ミルケリームは爆弾を投げ、シユルクレイムは弾丸を飛ばし続ける。

煙でライラ付近が見えない

ミルケリーリー　へへ　俺たちのお菓子タイムを邪魔するからね」

シニ川ケレイム・んだんた
思し知二たか三

ライラ「ぬるいわね、」

煙がだんだんと晴れていく。

状況は変わっていない。

パーフェクトガーディアンにはやはり傷ひとつ付いていない。

ライラ「ガーディアン、力の差を見せ付けなさい？」

パーフェクトガーディアンは少しだけ態勢を変える。

直後、嵐のような音が部屋中に轟いた。

パーフェクトガーディアンの盾から無数の銃や大砲が飛び出し、2人に向けて一斉射撃を始めた。

大砲は2秒おきごと、ガトリングガンは絶え間なく発射されている。盾のに無数に広がる銃や大砲は常に動きっぱなしだ。

しかも弾切れはない。弾の供給源はライラの魔力だ。
尽きるはずがない。

ヴィーナス「ガーディアンさん、やつぱりお強い」

ハウリロップス「なあ、俺ら帰ってイイか？」

ケルビム「せつかく楽しめると思つていたんだが」

ライラ「ダメよ、あんなんじゃやられません。大丈夫ですよ。ちゃんと戦えますから。」

29話 お嬢様による一方的な攻撃つてどーよ（3）

パーフェクトガーディアンによる一斉射撃により、煙が立ち込めている。

何をされるか分からないので一同はパーフェクトガーディアンを盾に隠れる。

あの猛攻を耐えられるはずはないと、リップや精霊たちは思つていた・・・

シユバリエ「A級2人、生存しています・・・。」

ライラ「ヴィーナス、煙を。」

ヴィーナス「了解しました。えいつ！」

周辺の砂煙は全て消えた。

一瞬で消えたので、おそらくどこかへ飛ばしたのだろう。

空間移動は、質量が小さいほど簡単にできるため、砂煙程度なら10km以上遠くにでも飛ばすことができるヴィーナスは言つ。

そこには、男が2人、ミルケリームとシユルクレイムだ。
2人とも無傷である。

ミルケリーム「ふう～痛いネ～、でも全く効かないネ」

シユルクレイム「でもどうする『』、攻撃全く効いてない『』」

ミルケリーム「いつするネ。デンジャー・ワールド！」

部屋がガクガクと動き出し、パネルが割れ、たくさんの突起物が出てくる。

天井には鍾乳洞の先が丸っこくなつたようなもの、床は足っぽのようないも、壁には硬い柔毛に似た形のものが出現した。

ハウリロプス「なるほどなあ。お前らは物理攻撃は全く効かないんだな。そのお肉で全部弾いちやうんだ。俺もそんなの漫画の世界だけだと思つてたけど、実在すんだなあ。」

これもフィクションだが、スルー。

ライラ「少し違いますね。あのお肉はただのお肉じゃないです。あの肉には密度の濃い魔力が混せてあります。故に、当たつて致命傷になる確立はゼロ。」

ケルビム「なんなら試そつ。」

ライラ「ええ。

ケルビム、ハイン・ソルアロー！」

ケルビムは黒光りする弓を構え、右手で矢を生成する。紅く染まり、血液が流れているようにみえる。

矢を弓にこめると、弓に赤みが増す。

ケルビムは目を細くし、狙いを定める。

ケルビム「喰らえ！」

矢を放つ。

矢は2人に向かつて1直線に飛んでいく。

ライラ「サデル・ツインアローズ！！」

今度は紫色をした矢が現れる。どちらも禍々しい。
弓にセットすると黒に青みがかかる。

ケルビム「はあっ！」

2本の矢が飛んでいく。

まずは先に放った矢が着弾。1発ですさまじい破壊力。その周辺は床も抉られ、足つぼのゴツゴツもきれいに無くなつた。
続いてサデル・ツインアローズ。

さつきの矢は爆発系だったのに対し、こちらは放射系のようだ。
着弾地点からは蒼い炎がメラメラと燃えている。

さつきの爆発により、天井の鍾乳洞のようなものもガラガラと2人に向かつて落下する。

ライラ軍は、その風圧により、一瞬怯んだが、すぐに戻つた。

ライラ「ヴィーナス、煙」

ヴィーナスはまたも煙を転移させる。
そして、そこに2人はいない。

ケルビム「あのくらいで木つ端微塵とは、情けないな」

シユバリエ「う、上です！上に一体！、そして……」

シユルクレイム「はい嬢ちゃん、黙るヨ～」

ライラ「見つけた！ハウリロップス、まずは1体閉じ込めて！」

ハウリロップス「飛んで火に入る夏の虫ってねｗセキュリティ・ゾーン！」

シユルクレイム「え、な、何だこれは！」

シユルクレイムの周りにひとと1でできたコードが大量に現れ、シユルクレイムを中心に、直径2mくらいの球体になった。

若干透けていて、シユルクレイムが中からこの球体を殴りつけるのが分かる

口をぱくぱくさせているが、出せヨー・出せヨーと叫んでいるのだろう。

ハウリロップスはライラにどや顔をする。ライラもどや顔を仕返す。

ミルケリーム「忘れんなネ！メタボリック・ネットーー！」

ミルケリームは四肢を大きく広げ、それを全て前に突き出す。すると、魔法陣が現れ、汚いが大きい網が現れる。

ライラ「ガーディアン！」

パーフェクトガーディアンはそのまま網を被ることになった。

ミルケリーム「ははははー！かかったネー！その網は脂肪でできているね。だからそのゴーレムはもう動けないネ！オデの脂肪は硬いネ。」

パーフェクトガーディアンは、網を引きちぎる。

パーフェクトガーディアン「つまらん」

ミルケリーム「え？」

P.Gは拳で球体の檻に閉じ込められたシユルクレイムを叩き潰す。グシュー、という嫌な音がなつた。恐らく、球体の中にいたため、逃げようが無かつたため、跳ね返すことができなかつたのだろう。

P.G「主殿、帰るぞ。つまらんな」

ライラ「ええ、あとはケルビムに任せますわ。ハウリロップス、ヴィーナス、貴方たちももう帰つていいわ。」

ハウリロップス「ん、ああ。何か出番少なかつたけど、可愛いから許してやるか。」

ヴィーナス「久々に会えて嬉しかったわ。お元氣で。」

各自、魔方陣を出現させ、中に入つていく。

ライラ「さあ、ケルビム。あなたが止めを刺すのです。弱点はあります。」

ミルケリーム「弱点なんかないネ！完全無欠のこの脂肪、敗れたこ

とは無いネ！」

ライラ「彼の弱点、それは物理攻撃以外の攻撃よ。つまり、瘴氣。

」

30話 お嬢様による一方的な攻撃ついでよ（4）

ケルビム「ほう、瘴氣とな。しかし、奴に効くのか？」

ライラ「ええ、間違いなく効きます。彼は特殊攻撃には弱いはずです。」

リップ「・・・Jのフィールドですか？」

ライラ「正解です。Jのフィールドは、あの2人のためだけに創造されたフィールドで、私たちがあの壁に叩きつけられたとしますよ。もちろんただじやすみません。しかし、彼らの場合は違います。壁に激突しても勝手に跳ね返されるでしょう。そんな最強の防御力を誇る彼らのために作られたフィールドに、なぜ毒や瘴気を撒き散らすギミックがないか。それは、彼らの弱点だからです。彼らは、自分たちのためのフィールドによって、滅ぼされるのです。」

ミルケリーム「あの金ピカがいなけりやー! うちのもんだネー! 嘘らえ、ミートボールボム!」

ライラ「ケルビム、全部落としてください。」

ケルビム「了解した」

上空から爆弾が降つてくるが、ケルビムの放つ矢によつて全て上空で爆発してしまった。

ケルビム「攻撃力はさほど高くないのだな。恐れるに値しない。」

ケルビムは更に矢を放ち、ミルケリームがつかまっている突起物を破壊する。そして、落ちてくるミルケリームに拳で1発。

ミルケリームはすゞい勢いで飛び、壁に激突する。しかし、弾き返され、2バウンドして止まる。

ミルケリームは起き上がり、何とか策を練りつとしている。このままだと、弱点がバレてしまつ。あの精靈なら絶対できる」と

既にバレている。

ライラ「もういいわ。ケルビム」

ケルビム「ああ。シェルビー・アロー！」

矢の形をしたようなコラコラしている不安定な黄緑の炎が、ミルケリームに命中する。

されば、弾き返されることはなくミルケリームの体を貫く。が、傷はない。

ミルケリーム「う、何だネこれは・・・ナシダ、ウウ・・・くソ！
うう宇和輪ああああああああああああああああああああアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ミルケリームは突然発狂し、のた打ち回つた。

ライラ「もつといわ、帰りましょ。この程度の瘴気に負けるとは。

L

ケルビム「ならば私も帰らひ。また必要なときは呼んでくれ。」

ライラ「ええ、ありがとうございます。」

ミルケリームを残し、部屋を後にするライラ一行。
リップとショバリエは少し引きつった顔をしている。

ライラ「へ~どうしましたか?」

リップ・ショバリエ「いいえ、何も・・・」

シユバリヒ「あ、ライラさん。A級の反応がなくなりました。」

ライラ「へえ。ところで何番隊だつたんでしょうね。」

お嬢様は歩く

31話 花の女王（前書き）

だんだん誰が誰だか分からなくなつてきました

これは1話完結です

31話 花の女王

プロッサム、ロイはジニアットのマスター、アシュリーの元へ向かう途中、敵の奇襲を受けた。

そして、ハーピィ唯一の戦闘狂でありマスターでもあるプロッサムがその戦いを引き受け、ロイにマスターを探すように命じる。

s i d e プロッサム

ボシキ・リヤン。

大して強いわけでもないのね。

早く片付けてロイに追いつかねば。

プロッサム「フレグラランス！」

プロッサムの前に花のつぼみが十数個現れる。
どれもピンク色で、あまり大きくはない。

プロッサム「シユートオー！」

プロッサムの前にあるつぼみがピュンピュン…と音を立ててボシキを狙う。

しかしその反面、全く見当違いな方向に飛んでいるものもある。

ボシキ「当たるかよ！」

ボシキは左右上下、巧みに動き、全ての薔薇をかわした。

薔は壁や床、天井に激突する。

そして、潜り込む。

ボシキ「へへ、甘いな姉ちゃんー今度は俺から行くぜ。『ワンドセイバー！』

ボシキの両手に魔力でできた緑色の薄いが幅広の刃が現れた。

ボシキ「脳天から真っ二つにしてやるよー。」

ボシキがブロッサムに襲い掛かる。

ブロッサムに駆け寄り、まず左で頭を貫こうとする。少し頭を反らし、ブロッサムは攻撃を免れる。左手を伸ばしたままボシキは右回転し、右手でブロッサムに斬撃を繰り出す。

またも銅を少しそらし、斬撃を凌ぐ。

ボシキは攻撃の手を休めることなく両手を頭上に掲げる。そして、それを一気に振り下ろす。

剣の残像がうつすらと見える。ボシキは舌を出す。
だが、ブロッサムには当たらない。

舌を戻し、そのまま左に回転し、両手で剣の一閃を繰り出す。

ブロッサムはバックステップで避ける。

ブロッサムはふうと息をつき、右手に剣を出現させる。柄は赤、緑、
黄色のマーブルな色を持つ花だ。

ボシキが更に追い討ちをかけよつとする。

右手でブロッサムの頭上から振り下ろすとするが、花剣によつて
防がれる。

しかし、左の剣が腹へ忍び込んでくる。

ブロッサムはそれを見逃さず、体をひねつてギリギリのところでかわす。

ブロッサムは剣で右手の剣を押し返し、伸びきつているボシキの左腕を狙つ。

ボシキは態勢を崩されながらも右手の剣で防ぐ、なんとか間に合つたと安堵の表情を見せる。

しかし、ブロッサムは前蹴りで少々油断気味だつたボシキの腹を蹴り飛ばす。

ボシキは怯んだが、ブロッサムもそれ以上は追つてこなかつた。

ボシキ「さすがに一筋縄ではいかねエか。」

ブロッサム「一筋縄でもいかないわよ?」

ボシキ「そんな言葉知るかつての!」

ボシキは再び動き出し、ブロッサムに向かつて斬撃を繰り出す。ブロッサムも防御だけでなく攻撃し始め、お互いの剣がぶつかり合い、金属音を散らす。

花剣は剣とぶつかり合つたびに少しづつ剣の下からピンク色に染まつていく。

その様子にまだボシキは気づかない。

そして、さつきブロッサムが放つたフレグラムたちは、壁、床、天井から小さい芽を出していた。

だがコレも気づかない。

ブロッサムが若干防戦一方なのはこれらに気づかせないためである。

ブロッサムは若干だが、攻撃もするようになり、ボシキに当てるのではなく、剣を狙つていた。

ボシキは、この剣は飛ばねえぞ。と笑つ。

ブロッサムは無視して斬りかかる。

キンキンキン

1秒間に2回は鳴っている。

とてつもないスピードだ。

両者ともに超人的なスピードで立ち回っている。
しかし、花剣の性能、フレグラランスの状況からすると、ブロッサム
のほうがアドが大きい。

ボシキは後退し、手に魔力を集中させる。
すると、剣が緑色から水色に変わる。
すると刃は長くなり、幅が狭くなつた。
スピード重視の刃である。

ブロッサムの剣は刃物とぶつかり合わなければ意味がない。
そして、ボシキは今、更に速く動く剣を装備した。
剣を動かしているときは相手の剣どころではないだろう。
自分の剣を動かさなければ速すぎる故動きが鈍ってしまうからだ。
常に次の攻撃を頭でイメージし、行動しなければいけない。
相手の剣より、自分の剣なのだ。

ボシキは再びブロッサムに剣を振るう。

今度は残像がハツキリ見える。青白い筋だ。

ボシキは双剣を巧みに操り、音速の剣を振るう。

ブロッサムは剣を全て受け止める。全ての剣を最大の衝撃で受け止
めるように花剣を操る。

花剣のピンクゲージが半分に達した。が、しかし、ボシキの目は完
全に自分の剣に向いていた。

故に、ブロッサムの剣の変化に気づかず、剣を振るい続ける。

フレグラ NS の芽は、膝丈ほどになつていた。

ボシキはさすがに気づいた。

ボシキ「な、何だコレは・・・」

ボシキは振り返り、緑が増えた通路を見て驚愕する。

ブロッサム「こっちよーちゃんと見てなさいー。」

ブロッサムは振り返つているボシキに斬りかかる。

ボシキ「クッ！」

ボシキは両手でガードする。

そして、ボシキは気づいた。

ブロッサムの剣の色が変わつていて。

ボシキ「剣が・・・」

ブロッサム「コレでアンタはもつ終わりだわ。それまでに私に早く止めを刺さなくていいの〜？」

ボシキは脣をかみ締めながらブロッサムに斬りかかる。
ボシキでも分かる。

力の差が。

そして、斬撃を繰り出してくるうちに、花剣のギミックにボシキが

気づいた。

ボシキ「それ、まさか斬撃の衝撃で・・・」

プロッサム「そりや。」

ボシキは唸る。この剣だと進行が早まるのは一目瞭然だ。そう悟つたボシキは後退し、両手の剣を重ねる。

すると、刃は赤くなり、刀身は太く、幅も広くなつた。

ボシキは回転して、その勢いを利用して剣を振るひ。プロッサムは横から襲つてくる刃を避けようとはせず、剣で受け止める。

プロッサムは耐え切れず、吹き飛ばされ、壁に向かつて飛んでいく。

プロッサム「フレグラランス！」

壁のツタが高速で壁を伝つて伸びてくるが、衝撃は殺せず、壁をへこませる。

プロッサムはヨロヨロと立ち上がり、笑う。剣のゲージがMAXになつている。

プロッサム「なかなか、よかつたんじゃない？」

ボシキ「まだまだあ！」

ボシキは更に回転し、剣を振るおうとする。

が

プロッサム「花は美しいだけではなく、自分の身を守るために毒をもつのよ。あなたは動けなくなるわ。サイレント…！」

剣先をボシキに向ける。

剣先から桜が噴き出す。それは、ボシキを包み込む。

ボシキは剣を消滅させてしまった。いや、もうすでに動けず、魔力供給ができなかつた。

ボシキはそのまま倒れ伏す。

プロッサム「動けないでしょ？花はね、身を毒だけでなく武器でも守るのよ。棘よ。あなたは意識がハツキリしている中でその棘に包まれて死ぬの。」

ボシキ「何……だと？」

プロッサム「ボシキ・リヤン、あなたを剣使いとして敬意を表すわ。」

プロッサムはロイの駆けていった道を進む。

ボシキの足元から草が伸びてくる。

ボシキ「く、来るな！」

足の先から草が絡みついてくる。草には棘が無数についており、皮

膚にズブズブと刺さり、血がにじむ。

— ! . ! . ! . ! . ! .

ボシキの全身を草が包む。というより巻いていく。

草のカーペットはそれから2メートル程前進し、成長が止まつた。

ボシキの声はないが、ボシキのいた場所は赤く染まっている。

32話 魔狼と魔女（1）

400人にも及ぶ兵士の殲滅を任されるイグナムとサフィア。しかし、そこで見せたサフィアの本性。

彼女は人間ではなく魔女であり、強さを求めて人間界に降りてきたという。

そして、イグナムはサフィリアから決闘を申し込まれる。

イグナムの目の前には3メートルほどの死神が3体。浮いているせいか、大きく見える。

それぞれサイズを持つている。

骸骨だから表情は分からぬが、笑っているようにも見える。

イグナム「全て計算のうちだつたつてわけか・・・」

サフィリア「そうよ。早く倒してアタシと勝負しよ 」

イグナムはサフィリアに今襲つてくる気がないことを確認すると、死神たちに視線を向ける。

死神が動き出す。中央の死神がサイズを振り上げる。イグナムは振り下ろす前に横に移動し、右側の死神に飛びかかる。

中央の死神のサイズは空振りし、イグナムめがけて横に振る。

イグナムはさらに右に横つ飛びし、サイズを避ける。が、死神からは視線ははずさない。

中央の死神のサイズが右側の死神に向かって止まらない、右の死神はサイズの柄で受け止める。

何事もなかつたようにイグナムへと視線を向ける。

イグナム「蒼魔炎！」

イグナムがそう唱えると、イグナムの口の周りに3つの魔法陣が出現し、口の中からは蒼い炎が溢れ出す。

イグナムが再び死神に飛び掛る。左の死神が前に出てサイズで受け止める。

サイズの柄とイグナムの歯が擦れあって、火花が散る。

そのうち、サイズの柄に青い炎が伝わっていく。死神はたまらずイグナムを押し返す。すると、青い炎はだんだんと消えていった。

イグナム「召喚！魔刀火鼬！」
ひいたち

イグナムの口に忍者刀のようなものが現れる。

イグナム「リンク！！」

口の中の炎が刀を伝つていく。そして、刀全体を包み込む。魔方陣は剣に吸収され、剣には魔方陣の模様が刀身にミニサイズで3つ浮かび上がる。

前に出ていた左の死神がサイズを掲げて襲い掛かってくる。

イグナムは軽いステップで横にステップし、首をひねつて刀操る。死神の懷に潜り込み、はねる。眼前に来たところで首を思い切りひねる。

刀が死神の頭部を直撃する。死神の頭蓋骨は耐えられず穴を開ける。その瞬間、死神を力を失いバラバラと崩れだした。地面に骨が落ち、

しばらくすると色が薄くなつていつて、消滅した。

残り2体

仲間がやられようと平然としている死神は、まさしく地獄のソレだ。イグナムは自分の幻術の完成度の高さに少し興奮した。

こうなつていたのか、と今まで幻術にかけられたものを同情する。

死神はお互いの動きを邪魔することなく、しかし自分勝手に動く。

イグナムは右側の死神に斬りかかる。

中央の死神がサイズの石突きでイグナムの腹部を突く。

イグナムは空中で1回転して、攻撃を避けるが、軌道を大きく逸れて着地する。

左の死神が、サイズを後ろに大きく振る。イグナムはもちろんこの後の攻撃を知っている。

左の死神はサイズを投げた。水平に回転しながら飛ぶそれは、イグナムめがけて飛んでいく。もう片方の死神も同じ行動を取った。

イグナムに向かって飛んでいく2つのサイズ。

1投目は身をかがめることで簡単に避けるが、2投目はそれを予測していたのか全く避けようがない。

イグナムは首を下から上に振り、刀でサイズの軌道を逸らす。

サイズは消え、死神に新たなサイズが現れた。

33話 魔狼と魔女（2）

2体の死神は浮遊しながらイグナムに急接近する。

死神に挟まれるようにならされたイグナムは、火薙を口から放す。刀は空中で自ら動き、イグナムの腰の鞘に向かう。

最後に、口に残った青い炎を死神たちに向けて適当に放つ。死神には何ともなかつたが、牽制としては十分だつた。

イグナム「レイズ！」

イグナムは右前足を高く振り上げ、魔力をこめる。すると、右前足が発光し、バチバチと帶電する。

それを勢いよく床に叩きつける。

床にイグナムほどの大きさの魔法陣が現れる。魔方陣は黄色い光を放つてゐる。月のような魔法陣が雷を放つ。魔方陣のいたるところから出たそれは2体の死神へと向かっていく。

死神は避けようと後ろへ下がる。

1体は何とか逃げるが、もう1体は逃げる際に雷が左肩に直撃し、左腕を失つた。

再生はしないようだ。衣服も黒く焦げてゐる。

バランスがとれず死神は大きくよろける。

イグナムはそれを見逃さず、一気に接近し、飛び掛るように右手で死神の頭蓋骨を掴む。

魔法陣が現れる。今度はそこまで大きくない。

黄色く発光したそれは、またしても雷を放つ。今度は逃げようがなく、全ての雷が死神の骨に突き刺さる。眩いほどの光を放ち、死神を貫いた雷はすぐに消え、残つたのは衣服の燃えた後の灰だけだ。

死神も残り1体。

イグナム「ディープスノウ」

そう唱えると、イグナムの両前足が白色に青色の筋が入ったような模様になる。

その周囲には皿ほどの魔法陣が6個周回していた。

死神は動かず、こちらの様子を窺っている。

イグナムはゆっくりと歩き出す。イグナムの前足が踏んでいたところは薄氷が張っている。

イグナムと死神が対峙する。

同時に動き出す。

イグナムは飛びかかり、死神は同時に横へ逃げ、サイズをイグナムに向けて薙ぐ。

イグナムはジャンプして避け。右前足の前に4つの魔方陣を移動させる。

すると、中央から小さな氷の弾丸が飛んでいく。

死神は横に高速移動しながらそれらの弾丸を全てかわす。着弾地点はわずかに凍つている。

イグナムが着地する直前、死神がその瞬間を狙つてサイズを掲げて接近してくる。
サイズを振り下ろす。

ガキン！

イグナムは咄嗟に火瞳を口に銜え、何とか攻撃を受け止めた。

死神は追撃を試みる。イグナムはそれを避けつつ、たまに刀でいなす。サイズはかなりの速度で動いている。

攻撃の合間にイグナムがリングと放つ。

刀は冷氣を帯びる。魔方陣も刀に吸われ、6つの紋章になる。

死神の攻撃を受け続けていたイグナムが、サイズを弾き返した。

5つの魔法陣が浮き出る。

刀に雪の渦が巻き、切つ先に行くにつれて細くなっていく。

イグナム「氷刀・雪狐、魔氷連刃！」

イグナムは口から雪狐を落とす。刀はイグナムの胴体を囲むようにいくつもの刀が現れる。

胴体を十数本の刀が囲む。

イグナム「雪月花！」

花のように開く刀はイグナムの合図によつて一斉に死神に向かって飛んでいく。

死神はサイズを振り回す。一見テタラメだが、サイズは確実に刀を防いでいる。

しかし、それら全てを防ぎきれず、何本か死神の体を貫く。

その数4本。

刀が貫いた場所は、パキパキと音を立て、体が凍り付いていく。体のほとんどが凍った死神は浮遊できずに床に落下した。

イグナムは刀を戻し、再び前足に戻る魔方陣を確認してから、前足で死神の頭蓋骨を踏み潰す。

「バリン！」と音を立て、頭蓋骨が砕け散る。

3体の死神が絶命した。もともと命などなかつたかもしれないが。

死神の残骸も光の泡となつて消滅した。

「アハハ！！いいじゃん！全部倒したわね。けれど、ここからが本番よ。全ての誇りをかけて、あなたを叩き潰すわ。魔狼さん」

「魔女、訊きたいことがある。魔女、その他の魔人は人間界では長くは体が持たないはず。ではなかつたか？」

「ええ、そうよ。てことは、分かる？」

「人間の……か。」

「当たり。この体は人間の少女。名はビスカ、かなりの魔力を有していた。人間界に降りたばかりのアタシは幸運にもそんな少女と出会つた。」

「殺したのか」

「まあ、そうよね。でも彼女から殺してくれつて言つてきたのよ？」

「ほう、まあ私には誰が死のうが生きようが構わんがな。」

「アタシだつて、ちょっと躊躇つたわよ。魔力は惜しいけど、少女

じゃねえ・・・もつといひセクシーな美女の体を頂きたかったわ。

「

「といひことは、何か理由がありそうだな。」

「彼女はね、幼いにも関わらず、とても醒めた口調だつたわ。怯える様子もなく、ただ力になりたいと懇願してきた。とにかくしつこいから体をもらつたけど、この感覚からいうとこの子は未だに生きている」

イグナムは、無関心に、ふんと首を縦に動かす。

34話 魔狼と魔女（3）

サフィリア「興味なさそうね・・・まあいいわ、始めましょ」

イグナム「ああ、そうしよう。少女の話などに興味はない。お前を倒さねば終わりそうにないしな。」

イグナムは火鎧を口に銜え、サフィリアに向かつて駆け出す。横を掠めるようにとび、刀をサフィリアの顔に当たるよつに調整しながら首を振る。

サフィリアは態勢を低くしてそれをかわす。そして、体をくるりと反転させ、イグナムのほうを向く。
そして、イグナムと退治するよつに並ぶ。

体格差は歴然である。少女に対して、少女2人分はあるかという頭の高さ。モンハみたいにどんなにデカくても狩つてしまつなんてことはあまり想像できない。

サフィリアは態勢を低くし、跳んだ。少女とは思えない跳躍力でイグナムの頭ほどの高さに到達した少女は、イグナムの顔に蹴りを入れる。

不意をつかれたイグナムはそれをまんまと受けてしまった。
またもや少女とは思えないキック力で、イグナムは後ろに真っ直ぐ吹っ飛び、壁にめり込む。

少女と思って油断していた。パワー、スピード共にかなりの能力値だ。

少女は着地後もイグナムに向かつて急接近する。イグナムの頭の下に潜り込み、真上に足を蹴り上げ、イグナムの顎を蹴り上げる。そして、前足をつかんで投げ飛ばす。

イグナムは蹴られ投げられて、わけが分からぬまま飛ばされ続ける。

少女は空中のイグナムに向かつてまたも跳躍し、踵落としを背中に与える。

すさまじいスピードでイグナムは落下し、ズドオオンという音と共に床に落ちる。

イグナムは血を吐きながらも立ち上がる。

少女はその近くに着地する。

イグナムは咆哮する。少女にここまでやられるとなると、プライドもクソもあつたものじゃない。

イグナムは途中で落とした火鎧を魔力で鞘に戻す。

イグナム「魔刀・闇乃雲」
アンノウン

暗い色をした刀が現れ、口に銜える。

イグナムは、少女に向かつて走る。刀を少女に向けたとき、刀から煙が放たれる。薄暗い煙は少女を包み込む。

「こんなの効かないわよ。せっきの見てなかつたの？・・・・・・。
・？？！」

この煙には魔力は込められていない。つまり、何の変哲のない煙だ。少女は慌ててかき消すが、既にイグナムはいない。

イグナムは、少女の頭上にいた。イグナムは落下と共に少女に向かつて首を振る。

しかし、少女はそれを跳んで回避し、刀はまたも空を切る。

「蒼魔炎、リンク！」

口から青い炎があふれ出し、刀も炎を纏う。

イグナムは少女に向かつて走り、前足と組み合わせて少女に連続で攻撃を繰り出す。

少女は、跳んで、時折蹴りや手刀を使ってそれらをかわす。

「レイズ！」

蒼魔炎を使いながらレイズを発動する。魔法陣が少女を狙う。

「クッ！」

少女は魔方陣を開き、攻撃をガードする。魔方陣はレイズを全て受け、ボロボロになつて消滅した。それを狙つて前足を少女に向かって引つかくように突き出す。少女は避けきれず、腕をクロスして防御を試みるが、吹つ飛ばされて壁に激突する。少女はすぐに立ち上がり、魔方陣を出現させる。

「くつ、ファイアボール」

少女がそう呟くと、サツカーボール大の炎の玉が数個現れ、イグナムめがけて飛んでいく。

イグナムは所詮初級魔法だと、前足で弾こうとするが、桁違いの魔法だった。

たまらず避ける。横に走り続けて全て打ち終わるのをまつ。

「ハア・・・・ハア・・・・何をした・・・」

走りながらイグナムは少女に問う。

「少しだけ闇属性を混ぜたわ。ここまで威力が上がるとはね・・・」

「そういうことか、なら!」

イグナムは突然止まり、黒い魔方陣を出現させた。

炎の玉はそれにぶつかると、ジュツと音を立てて消えた。

35話 魔狼と魔女（4）

「そつちが闇属性で攻撃してくるなら、こっちも闇属性で防げばいいわけだ」

属性には

火、水、氷、雷、土、稀に無、闇、影、風、光がある。

人は生まれつき得意な属性や不得意な属性を持つて産まれる。得意な属性はもちろん威力が上がり、消費魔力が少なくて済む。逆に不得意な属性は威力はさほど変わらないが、魔力の消費が大きい。

属性には相性がある。

たとえば、火には水や土が有効である。闇や光は相性が関係ないが、闇は闇に弱く、光は光に弱い。無属性は特にそういうものはない。

コレは、あまり一般に知られておらず、魔人などがとても詳しい。

「やはり知ってたわね。だからって変わらないわ。闇同士だったら単純に攻撃力の勝負よ」

イグナムはレイズを発動するが、魔法陣が暗い。魔方陣から雷が出現する。雷は黒色になつていてる。

「雷に闇属性を混ぜた。どうだ、避けるか？」

「アンタもできたのね。だけどまだ甘いわ」

少女は後ろに下がり、魔方陣を出現させる。

両手の前に現れた魔法陣はレイズを次々と受け止め、進行方向を逸らす。

レイズを全て防ぎきつたあと、魔法陣を重ねる。すると、黒い剣が現れる。

「！」の剣は刃の部分が闇属性だけで作られた剣よ。」

「ふん、闇乃雲は闇属性だが薄いな。元々あれは手加減用だからな。」

「

イグナムは闇乃雲を消滅させる。

「精靈刀・聖魔」セイント・ビル

刀身が真っ黒な刀が現れた。イグナムはそれを口に銜える。

「この刀は刃の部分だけではない。柄も、鍔も、何もかもが純闇属性だ。そんなんまくらでこの刀を破ると？」

少女は走る。両手で持った剣でイグナムに斬りつける。イグナムは首を少し動かして受け止める。剣の刃はジジジとスライドし、鍔の部分で止まる。イグナムは首を振つて少女を振り払う。

少女は振り払われて後ろに大きく後退する。

あの刀は確かに脅威だが、触れなければいい話。避けつつ少しづつダメージを与えるよという結論に至った。

少女は再び走り出す。両手を掲げる、それに釣られてイグナムは首を振る。

だがコレはフェイント、両手を素早くしまい、態勢を低くして前足

を切りつける。イグナムはカクンと崩れる。イグナムは斬られた足を振る。運悪く少女はそれに当たって吹っ飛び。

壁にめり込み、しかし勝機に満ち溢れた表情をしている。

イグナムはまよいと思い、そろそろ追い討ちをかける。刀で少女の剣を弾き飛ばそうとする。

だが、刀は口に銜えられているため、片方からしか斬撃が来ない。少女は軽々避け、するじと背後に回り、後足を斬る。

「ウグウー」

苦しそうにイグナムはつめき声を上げる。

「くそ・・・ちゅこまかと・・・」

もう既にイグナムが悪役みたいになっている。

「聖魔は血を吸い、浄化する聖なる悪魔だ、ブラッヂバインド！」

イグナムの傷から体外に出ている血だけが浮き、刀に勢いよく吸収されていく。

黒い刀は血を吸った後、何事もなかつたように真っ黒になる。

「まだ血が足りぬな。もっと血を・・・」

注意：イグナムは一応正義です。

イグナムから斬りつける。

少女はまたも軽くかわそつとする。

「… 速い！」

少女の頬から血がツーと垂れる。
それすらも刀は吸収していく。

「さすがは魔女の血、すばらしいな、魔力に満ち溢れている。」

少女は短期決戦に持ち込もうと、剣を握る。刀のスピードに合わせて剣で受け止める。

無駄に血を流させてはいけない。決めるなら一撃だ。そう悟った少女は反撃のチャンスを待つ。

だが刀もさつきと比べ物にならないほど速い。

イグナムは少女の考えていることが分かつた。

短期決戦に持ち込む気だろう。戦い方を見れば分かる。
いきなり攻撃を受け止め始めたということは私に反撃するチャンスを窺っているということだ。

こちらが大きな攻撃を仕掛けたら、相手は間違いなくその隙を突く。
このままチンタラやってても埒があかない。

どうする…！

イグナムが突然崩れる。

前足の傷から血がダラダラと流れている。相手に集中しすぎて自分の足に負担をかけていることに気づかなかつた。
前足が自分のものでないように力が入らない。

少女は目を見開く。

「アタシの動きに集中しすぎて忘れてたのかしら？」

少女は剣を肩の後ろに持ち上げる。

イグナムは動けず、ただ剣を待つことしかできない。恐怖を覚える。少女は歯を思い切り噛み締め、足を踏み込み、もてる全ての力を使つて剣を振り下ろす。

イグナムはそれが止まって見えた。まさに極限状態というのだろう。しかし、前足は片方しか動かない。その前足で少しだけ動き首を振つて剣を受け止める。

ガキン！

大きな金属音が鳴り響く、
部外者がいたら、これは不快音に他なら
ないだろう。

גַּם־בְּעֵד־

少女が叫ぶ、急に剣が重くなる

ニシノ

刀は押し負け、弾かれる。剣は振り下ろした際、衝撃波を放ち、イ
グナムはそれに包まる。

イグナムはその手前でぐつたりしている。

一
來
い
・
・
・
聖
魔
・
・
・
上

聖魔がイグナムに引き寄せられる。

「・・・ブランズベートンデー」

部屋中に飛び散つた血が刀に集まる。少女は呆然としている。少女が恐怖に包まれる。

イグナムは血だらけになりながらも笑う。

「これで終わりだ！エンティ・クレイム！」

刀が光る。黒い刀が紅い光を纏う。

イケナムは倒れそうにならぬからも顔を後ろに向ける。顔を反対向きにするように首を一気に振る。

黒い刀から極太の紅い衝撃波が出現した。
床、天井を抉り取りながら進む衝撃波は少女を狙っている。
少女は剣を放り投げて、両手を前に出す。

「ビスカ・・・力を貸して！」

少女が本当の少女の名を呼ぶ。

すると、少女の前に直径6メートルはあるかという目大な魔法陣が出現し衝撃波とぶつかる。

「……」アサヒが笑みを浮かべる。「アサヒ君、アサヒ君……」

両者ともに風圧で怯む。少女は耐え切れずに吹つ飛ぶ。

衝撃波が消え、床や天井が無惨に抉り取られた部屋が残る。少女は・・・壁に寄りかかって座っている。
息が荒いが、まだ気は失っていない。

「なん・・・だと・・・?」

イグナムはこれで決まったものだと想つて驚愕する。

少女は防ぎきつた。イグナムにとつてそれはショックだった。

「アタシは魔女よ・・?これくらい・・防げる・・わよ

36話 魔狼と魔女（5）

「な・・・アレを喰らってまだ動けるタだと?」

イグナムはこの攻撃で仕留めるつもりだったのだろう。相手がまだ戦闘可能な状態でいることに驚愕している。

「何故だ、お前にエングデ・クレイムを防ぐだけの魔力はなかつたはずだ・・・」

しかし、少女も防ぎきつたのだが、ふらふらな状態である。腕や足から流れる血が、少女もただではすまなかつたことが分かる。

「ありがとう、ビスカ・・・」

「…そいつだな。何をした?」

イグナムは、さつきの攻撃を防いだ鍵は、魔女の器だと悟る。

「この子はまだこの体の中で生きてるの。さつきは危なかつたわ・・・」

「・・・・! 2対1なんて卑怯だろ・・・」

「何言つてゐのよ・・・」

「ビスカ・・・だな? その少女とお前はなんなんだ?」

「うーん、最初は殺してから乗り移つたつもりだったけど、生きて

たのよね。生命力が半端じゃないわ。それで少し魔力を借りたの。ただし、彼女の魔力は彼女の魂に直結しているから、もちろん使いすぎると・・・死ぬわ。」

「どうでもよかつたんじゃないのか？」

「アタシも生き物だからね・・・情が移ったのかしら。」

「まあいい、お前はまだ生きている。それだけで十分だ。次こそ決める。」

イグナムは再度、聖魔セイントデビルに血を吸收させる。

周囲の血が黒い刀に集まり、触れ、吸い込まれていく。

その瞬間、少女が走り出した。

「ハツツ！――！」

少女が黒い刀を思い切り切り上げる。刃が正確に聖魔を捉えた。少女はその瞬間をしっかりと目視できた。

イグナムは不意をつかれ、刀を遠くへ弾かれてしまった。

「しまった！」のままだと刀が！――

刀が床に落なし、金属音を鳴らす。

そのまま血を吸収し続け、カタカタと音を立てる。

バリン！

聖魔セイントデビルが音を立てて飛び散った。

残つたのは柄の部分だけ。刃があつた部分には血だまりができる。る。

少女は刀を一閃する。全く無駄のない攻撃である。刀を振り切り、遅れて血が噴き出す。

「・・・・・ツ！」

イグナムは気を失いかける。急所の喉や腹は魔力によつて不可視の装甲が形成されているが、それを切り裂いた。傷は浅いものの、大きなダメージとなつたため、よろける。

苦し紛れに前足で少女をどける。

少女もそれは予期していなかつたのか、後ろに下がつて避ける。

イグナムは前足で魔方陣を出現させ、魔力の装甲を強化して、瘡蓋がわりにする。

「聖魔が・・・」

「あの刀がなきや、あれはもう出せないよね？」

「そんなことはない」

イグナムは、火鼬を装着する。

「雷鬼^{ライト}、土龍^{ドリュウ}、水猿^{スイエン}、氷牛^{ヒョウギュウ}・・・召喚」

イグナムの周囲に黄、茶、青、白の魔法陣が現れる。

その中央から刀の先端が現れ、徐々に全体が見えてくる。

腰に新たに4つの鞆が追加された。

「IJの刀は意思を持つ。故に、自分自身で行動する」とができる。」

そういうと、火鼬を手放す。

それぞれの刀は宙に浮き、獲物を探しているかのように動く。

「やれ」

イグナムの掛け声に反応し、一斉に少女に向かつて刀が飛んでいく。

「IJなんつー反則……よつー。」

少女は避け続ける。上体を反らし、体をひねり、刀で逸らす。

「…………ビスカ…………もう少しだけお願ひ…………」

少女の髪の毛が逆立ち、雰囲気が一変した。

「なんとこう魔力だ……」

イグナムは刀を呼び戻す。破壊されかねない。

殺氣を剥き出しにする少女は、イグナムを睨みつける。

一瞬だがイグナムは怯む。

少女は、恰も前に何かあるように刀を強く突き出す。

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

沈黙が流れる。

「グッ！」

イグナムが苦しそうに呻く。
見ると、魔力装甲を貫いている。
血が噴き出し、止まることなく流れる。

少女は力尽きたかのようにヘナヘナとしゃがみこむ。

「カハツ、ハアハア・・・ハア・・・・」

イグナムはまたも魔力装甲を強化する、があまり大した意味はないだろう。それはイグナム自身もよくわかっているはずだ。装甲がありながらも血はその奥から流れる。

「フウ・・・ハア・・・火鼬、雷鬼、土龍、水猿、氷牛・・・エレメント・アーティラシー！」

5つの剣は徐々に混ざり合い、一本の刀になる。これまでの忍者刀のように刀身が短くなく、かなり長いといえる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0087z/>

金剛の武人

2012年1月10日20時45分発行